我、此処にて舞い奏でる

音原織那

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

霊的災害が多発し、陰陽師が活躍する現代。

陰陽師の名門に生まれながらも、術を扱うことができない少年がいた。

膨大な霊力を持ちつつも、術を扱えない少年は世界の狭間で揺れ動く。

彼の少年は何を見る。

目次

前奏曲 1
神曲奏界ポリフォニカ
第一楽章 5
第二楽章 9
第三楽章 15
第四楽章 24
第五楽章 30
第六楽章 36
第七楽章 44
第八楽章 50
第九楽章 57
第十楽章 62
第十一楽章 68
第十二楽章 74
第十三楽章 87
第十四楽章 93
第十五楽章 99
第十六楽章 104
東京レイヴンズ
第十七楽章 113

前奏曲

僕が産まれた時、一族中の人間が狂喜乱舞したらしい。

赤子に見合わぬ膨大な霊力、それは彼等にとっては希望とも言えたのだろう。

超一流の陰陽師になる事ができると思わせられる程の素質を持った子供が分家の次男として産まれたのだから。

分家の人間は本家の式神になるという『しきたり』、運の良いことに本家で産まれた次期当主と僕達兄弟は同い年であった。

年を重ねる毎に強まる絆、互いの思いを尊重し合いながら自分達の家を再興する。

そんな夢を見ていたのだろう。

――だが、彼等の喜びは長くは続かなかった。

『先天性術式不全』

それが僕の掛かっていた病気の名前であった。

それが発覚したのは三歳の中頃。大人達が膨大な霊力を持った僕に簡単な術を教える事でその道の興味を持たせようと画策した時の事だった。

霊力を操る事は出来た。

放出する事も体内に留める事も出来た。
それを見た大人達は更にやる気を出して術式を印を教え始めた。
だが、ほぼ全ての術式が霊力を通しても何も起こらない。
初めて行う術なら失敗する事もあると初めの内は楽観視していた大人達だが、時間が経つにつれて何かが可笑しいと思い始めた。
きっとそれが全てが変わった瞬間だったんだろう。
僕の病気が判明したとたん、大人達は僕を相手にしなくなった。
話しかけても鬱陶しい物を見るかのように睥睨し、何処かへ歩いていってしまう。
両親は変わらず接してくれはするが、何処かよそよそしく。
一族の会合にも連れていって貰う事ができなくなった。
だが、その時の僕にとって一族の会合は同い年の子供である本家の女の子に会う唯一の機会だった。
両親と兄が本家に入るのを見た後、僕は本家に入り込もうと壁をよじ登り、その光景を見た。
見て、しまった。
『いいよ。俺が夏目ちゃんのシキガミになって、ずっと守ってあげる』
『ほんとうに?じゃあ、約束して?』

そして、約束の呪文が紡がれる。
これは遠い昔の記憶、僕の心に大きく罅が入った記憶だ。

◇◆◇

「久しぶりに見たな……あの夢」
目を開けてゆっくりと周りを見回す。
ギターにピアノ、三味線にトランペット。
様々な楽器が転がっているいつも通りの自分の部屋。
あの光景を見た後、僕は狂ったかのように自分が使う事の出来る術を探し続けた。
それは徒労に終わったとも言えるし、成功したとも言える。
誰かが作った式神を維持する。
僕にできたのはそれだけだった。
自分で式神を作る事はできないし、維持するために勝手に霊力を搾取していくからこそ出来たともいう。
それがわかった後、僕は全てを投げ出した。
家の事など知らないし、自分がやりたい事をやる。

そう言った時、父さんも母さんも複雑そうな顔をしながら喜んでくれた。
取りあえずは音楽にでも手を出してみよう。
だが、使えるものを使わないのは勿体ない。
そう考えた僕は、父さんに頼んで楽器の形をした式神を作ってもらった。
式神にしてしまえば持ち運びに便利であるし、普段使わない膨大な霊力も勝手に使用してくれる。
その結果が今現在の僕の部屋だ。
そんなことを考えながら転がっている楽器を式符に戻し、立ち上がる。
「さて、今日はどこで演奏するかな」

神曲奏界ポリフォニカ
第一楽章

僕が超一流の陰陽師になれると親戚一同が考えたのはその膨大な霊力量だけというわけではない。

その見鬼の力が異常な域に達していたからでもある。

高位の見鬼は霊気の流れや霊的存在を視認することだけに留まらず、術式や法理を見極めることが出来る。

だが、僕の瞳にはそれ以上に不可思議な物が見えていた。

赤、黒、白、青、翠、紫、金、銀といった八色の色が時に混ざり合い、時に色に会わせた塊となる。

そんな不可思議な光景が何を表しているのか、狂ったように術式を探し、学んでいく内にそれが解るようになった。

戦中に土御門夜光が執り行った大儀式の失敗により、東京を中　心に頻発するようになった異常現象、霊災。

それは自然界に満ちる霊気のバランスが乱れ、瘴気へと転じ、自然界の自浄作用の限

界を越えた時に生じる。
この自然界に満ちる霊気のバランスこそが僕の見ている色の正体だ。
そう考えた時、僕は考えてしまった。
『色のそれぞれに霊力を注げばどうなるのか』
そんな馬鹿なことを考えてしまったのは、久しぶりに同年代の子供と話し、自身の奏でる音を喜んでもらえたためか。
全ての色が空間から無くなったことで瘴気へと転じた瞬間を見た経験があったからか。
自身が霊力を音に乗せながら、曲を奏でると幾つかの色が集まるからだろうか。
未来の自分が見れば止めたかもしれない。
全てが終わったこの瞬間。
そんな考えなど、今となっては何の意味もないことではあるが。
◇◆◇
「ここ……どこ?」
小学五年の夏、僕は公園で演奏をしながら自分の好奇心を満たすために行動した。
この時、僕は好奇心は猫をも殺すという意味を身をもって体験したと言える。
霊力を音に乗せながら、均一になるように八色の光に霊力を注いでいく。

するとそれに合わせて八色の光の塊が大きくなり、それぞれの光が離れ、空間に穴を作り出した。
それに驚いた僕は演奏を中止して穴をよく見ようと近づいた。……近づいてしまった。
穴を覗き込んだ瞬間、光が弾け、穴もその形を崩す。
そして、穴を覗き込んでいた僕は形を崩した穴に巻き込まれて落ちてしまう。
次の瞬間、僕は見た事がない公園に佇んでいた。
自分でいっても訳が解らないことには変わりない。
後ろには大きな噴水、道路までの距離はかなりある。
付け加えるのなら人の姿もあまり見えない。
……これは。
「演奏するには持ってこい?」
先程まで演奏していたフルートを持ち直し、大きく息を吸い込む。
高音の音色は自身の不安を和らげ、逆に気持ちを高揚させる。
あぁ、これだから演奏はやめられない。
楽器を触っているだけでも気持ちが落ち着くというのに、それが両親が与えてくれたものだというのなら尚更だ。

清らかな音色が響き渡り、周囲に浮いた色の塊も楽しげに揺れている。
……ん？
色の塊が揺れている？
演奏を中断して周りを見れば、大小様々な色の塊がいろんな場所で浮いている。
明らかに人の輪郭をしているものから地面から生えていたり、浮遊した丸い形の物まで。
自身の周りを揺れていた丸い塊は何処かに飛んでいった。
背中を冷たい物が走った。
霊気のバランスは何処に行った……。
霊気を構成した要素が好き勝手に移動し、それでも霊気のバランスが崩れているようには思えない。
何が起きているのか、そもそも此処は何処なのか。
僕の中にそんな漠然とした疑問が再燃するのに時間はかからなかった。
……ポン
「え？」
「取り合えず、署まで来て貰っても良いかな？」
本当に此処は何処なのだろう。

第二楽章

「取り合えず、名前と住所は？」
　先程の公園から目と鼻の先にある交番で、僕は警察官の男と向き合っていた。
「土御門　奏希……福井県おおい町」
　……何か問題のある行動をしただろうか。
　警官に怒られるほどの事をした覚えはない……と思う。
「ツチミカド　ソウキ……っと、ん？フクイケ……ってどう書くんだ？」
　……福井県でわからないのかな？いや、わかるよね？
「悪いな……って、こりゃニホン風か？ってことは凰都ヴィレニスだな。初めからそう言えっての……めんどくせぇ」
　ニホン風？
　凰都ヴィレニス？
「んで、トルバスのケセラテ自然公園まで来て神曲を演奏した……と。いや、神曲自体は良い出来だったと思うぜ？お前くらいの年齢にしては」
　トルバス、ケセラテ自然公園、神曲……知らない単語ばっかりだ。

「だがな、今年から法改正されちまったんだわ。特定の場所を除いた場所で神曲を演奏するには許可が必要になっちまってなぁ」

その後も警察官の男性は話を続けていく。

なんでも、九年ほど前に起きたらしい嘆きの異邦人による事件とやらで甚大な被害が出たために、今年になって漸く、神曲楽士（ダンティスト）の資格取得や神曲に関する法整備が整ったんだそうな。

「あー……愚痴になっちまってすまんな。俺ら精霊からしてみりゃ嫌な事件だったんでな」

まぁ、よくはわからないが町中で演奏する事は問題があったらしい。

こちらが悪いのならば謝るべきだ。そう、父さんにも母さんにも教えられてきた。

「ごめんなさい」

「まぁ、次は気を付ければ良いさ。んで、お前さんの保護者は何処に……」

「あぁ、すみません。私がそちらの子の保護者です」

一番聞かれたくはない事を警察官が聞こうとしたその時、眼鏡を書けた優しい顔立ちの男性が姿を現した。

「ん、なんだ。あんたが保護者だったのか……なら、町中で神曲を演奏しちゃならん事くらいわかってるだろうに……」

「いえいえ、その子は今日来たばかりで直接会うのは初めてなんですよ。まぁ、事前に伝え忘れていたのは事実ですが……何せうちでは演奏は当たり前ですし」
「とはいっても、一部の限られた場所でだけだろうに……」
「それでも、ですよ。さ、行きましょうか？」
話は終わりとでも言うかのように、男性は僕の手を取って歩き始めた。

◆◇◆

「さて」
交番から離れ、長い柵が続く道に出たところで男性は立ち止まった。
「んー、何から話すべきでしょうか……取り合えず、此処が何処であるかという事からにしましょうか」
そういって、男性は優しげな笑みを浮かべて話し始めた。
此処はポリフォニカ大陸と呼ばれる大陸で、今まで僕が居た世界とは別の世界であるらしい。
なんでも、僕が居たというケセラテ自然公園には千年ほど前に、異世界とこの世界を繋げる事の出来る泉があったそうな。

その泉があちらの世界に繋がった時に、偶々男性の契約精霊が感知したんだとか。
「……精霊とか契約精霊ってなんですか?」
「あー……そこからですか。この世界には八種類の色の種から成る精霊と呼ばれる存在がいまして、彼等は人間の善き隣人でありますがその力は強大です」
その強大な力を持った彼等が人間の善き隣人足り得る理由の一つが人の奏でる神曲を糧にしている部分があるからだという。
そして、気に入った神曲を更に深く糧にするために契約という形で自身の在り方をその神曲を奏でる人間に合わせ、調律していく。そうすることで、更に強大な力を振るう事も可能になるらしい。
「じゃあ、……なんて呼べば良いんでしょうか?」
「そうですねぇ、学院長とでも読んでください」
質問をしようとして、今まで名前を聞いていなかった事を思いだしてきいたのだが……名前は教えてくれないらしい。
「……学院長さんも精霊なんですか?」
警察官に会ったときから思っていた事ではあったが、彼も学院長さんも体に光を纏っているのだ。
警察官は青色、学院長さんは翠色。そして、学院長さんの近くにいる人の輪郭をして

いる物も翠色。
「いえいえ、私は人間ですよ？」
かなり驚いたような顔をしてから言われても説得力が無い気もするけど、気にしない方がいいのだろう。
「へぇ……それで、僕は元の世界に帰れるんですか？」
「んー……流石にわかりませんねぇ。昔はかなり力を持った精霊に力を借りて繋げていたそうですから」
「そうですか。じゃあ、僕はこれからどうすれば良いんでしょう？」
「おや、思っていたよりも落ち着いてますね」
「まぁ、予想はできていましたし」
何せ泉が使われていたというのが千年前、今現在は使われていないとでも言うような口ぶりだ。
予想できないわけがない。
「取り合えず、私経営している学院の見学をしつつ、この世界を学んではいかがですか？生活費や学費は私が負担しますので」
「……嬉しい話ではあるんですが、なんでですか？」
この人とは初対面である。

初対面の人間に対してそこまで親切にしてくれる人間など存在しない。
少なくとも、親戚の人間はそうだった……。
ならば、この人は何を僕に求めているんだろう。
「そうですねぇ、条件として15才になったら必ず私の経営しているトルバス神曲学院に入学することというのはどうでしょう？」
……僕は神曲が演奏できていたという。
術が出来なくても神曲が演奏出来るというのなら、それも良いかもしれない。
「わかりました」
そう言うと学院長さんはホッとしたような顔で笑いながらこれからよろしくお願いしますと言って、再び歩き始めた。

第三楽章

この世界に来て一年半が経ち、僕は一つの事を結論づけた。
即ち、『この世界における霊気のバランスは極めて安定している』という事である。
あちらの世界では八色の光……便宜上精霊素とでも呼ばせて貰うが、ソレの一部が存在しない部分があれば霊気は瘴気に転じ、直ぐに自然の自浄作用によって修復されていた。
だが、この世界では瘴気に転じる以前の問題として、精霊素が存在しない部分等という物を見た記憶がない。
何故なら、霊気のバランスが崩壊し、精霊素の塊に変わる事そのものが存在しないからだ。
あちらの世界では精霊素の塊に変わった後に霊気のバランスが自浄作用によって修復されるような事が続いていた故に、この事に気がついた時は驚愕したものだ。
だが世の中、そんな単純な事ばかりではない。
僕はそれを今現在、体感している。
「ま、まだですかぁ?!もう投げれる物なんて単身楽団（ワンマンオーケストラ）位しかあ

りませんよ?!」
「ちょっ、ちょっと待って！此処がこうで……そこが……」
『ガァァァァァァァァァ！』
僕が現実逃避をしながら物を投げつける事になった理由は今から一時間ほど前まで遡る。

◆◇◆

「へぇ、あなたが噂の……」
学院の中を歩いていた僕に、声を掛けてきたのは肩ほどで黒い髪を切り揃えた強気そうな女の子だった。
ツゲ・ユフィンリー、そう名乗った彼女は現在基礎課程の二年生だそうだ。
此処、トルバス神曲学院は基礎課程二年、専門課程二年の合計四年制である。
彼女は調度その折り返し地点とも言える位置にいるようだ。
何故、折り返し地点と言うのか。
それはトルバス神曲学院には留年制度はなく、基礎課程から専門課程に上がる試験に合格できなければ退学が決定してしまうからだ。

……まぁ、トルバス神曲学院は年齢が１３才以上から幅広く生徒を募集しているため、再入学する猛者もいるらしいのだが。
「噂……ですか？」
「そう。最近学院内で見かけるようになった学院長の隠し子だとか、学院長が有望な子を引き取ったとか、色々あるわね」
どうやら、最近になって授業を見学したりしている内に噂になっていたらしい。
しかも、学院長さんの保護下に置かれている現状としては否定ができない。
「それで、そんな噂の僕に何の用でしょうか？」
「あぁ、たいした話じゃないんだけど。今度、進級試験があるから噂の隠し子君に評価して貰おうかなってね」
ツゲさんは断られるとは思っていないのだろう、苦笑しつつもその瞳は笑っていない。
その真剣な瞳は僕に逃げられると思ってんの？とでも言っているかのようだ。
「あ、はい。いいですよ」
この世界に来て暫くはこの世界の常識だったり勉強だったりに費やしてきたが、最近は学院で行われている講義を見学させてもらってきた。
だが、実際に神曲を奏でる瞬間に立ち会った事は一度としてなかったため、この状況

は渡りに船だった。
今までに僕は何度か神曲を奏でようと演奏をしていたのだが、一度もそれが成功した事はなかった。
調べたところ、成功していれば精霊が実体化して近くにいるというのが通説らしく、自身が演奏しても実体化している精霊は居ない。
酷いと実体化していない精霊すらも近くに居ないことすらある。
恐らくは何かが足りないという事なのだろう。
その足りない何かを知るには、今回の話は調度良いとすら思える。
「じゃあ、行きましょうか？」
今日の授業も終わっており、どうやらこの後直ぐに実習室へと向かうようだ。
先導して歩くその姿を見ても緊張をしているようには思えない。
自身が失敗をする筈がないと全身で表しているようにすら思える。
第一印象でも思ったが、やはり強気な人であったらしい。
そんな事を考え、僕は苦笑しながら彼女の後を追いかけた。

実習室に着いた彼女は迷う事なく設置してあった単身楽団――ほぼ全ての神曲楽士が使用する神曲の演奏を補助するための楽器。普段は持ち運びが便利な形に収納され

ているが、一度展開すれば内蔵する機械を利用する事によって内蔵された楽器の音量調節や伴奏の演奏まで可能となる――の中からヴァイオリン型の物を選び出し、慣れた手つきで展開していく。

小型の棺桶のような物を背負い、展開されていくにつれてアームのようにも見える反響板や浮遊しているスピーカーが飛び出てくるのは何処か滑稽にも思える。

……まぁ、トルバス神曲学院ではかなり古いタイプの単身楽団を配備しているからで、最近の物であれば見た目も洗練されているんだとか。

それでも新しい単身楽団に買い換えないのは、単身楽団の核とも言える賢者の石という産出量の少ない鉱石によってかなりの高値である事もそうなのだが、古いタイプの物を使っていれば大体の物に対応が出来るという理由があるそうだ。

「さて、じゃあ演奏するわね」

考えている内に展開が終わり、持参していた封音板（レコード）――伴奏などが記録されているもの――を単身楽団にセットしたツゲさんがこちらを見る。

そしてゆっくりとした曲を奏で始めた。

それは出会いの曲。

始めはゆっくりと、そして徐々にテンポが上がっていく。

既に曲の速度は始めとは比べ物にならないくらいの物になっている。

ポッ……
ポッ……
そして、丸い小さな観客が奏者の周囲を回り始める。
ボウライ。
精霊の中でも下級に属され、良く言えば神曲の選り好みをしない、悪く言ってしまえば雑食の精霊だ。
彼等が出ている以上、神曲である事は間違いがない。
「……え？」
そこで僕は一つの事に気付いた。
彼女からは霊気が放出されているが、意図して放出しているようには見えない。
にも関わらず、その霊気からは彼女の意思のような物が感じられる。
『私は此処にいる』
『一緒に楽しもう』
先程までの印象がガラリと変わってしまうような優しい意思（ココロ）。
『奏でよ、其は我等が盟約也』
『其は盟約』
『其は悦楽』

『其は威力』
『故に奏でよ、汝が魂の形を』
この学院に掲げられていたこの言葉の意味が、漸く解った気がした。
僕は神曲を奏でようとして、音楽を楽しんでいなかった。
神曲を奏でる事に固執して、聞く相手の事まで考えてはいなかった。
だから、神曲足りえなかった。
これが解っただけでも今回の演奏を聞く価値があった。
そして、神曲が終わりを迎える頃、新たに一柱の精霊が姿を表し、演奏は終了した。
精霊は所有している羽根の数によって等級が分けられ、下級が二枚羽根、中級が四枚羽根、上級が六枚羽根となっている。
彼女が最後に呼び出した精霊は四枚羽根、中級精霊である。
通常、専門課程に進級していない学生が中級精霊を呼び出す事は難しい。
プロの神曲楽士でさえ、一生下級精霊しか呼べない者もいる程だ。
学院と契約を結び、警備員として巡回している精霊であったとしてもその難易度は変わらない。
「あぁ、ウォルフィス。今日も来てくれてありがとね」
狼の形態をとったその精霊は一鳴きすると、再び実体化を解いて去っていった。

今の様子からすると、彼女にとって先程の精霊が危機に来る事は珍しくないらしい。
それだけでも、彼女の神曲楽士としての腕はわかる。
「……評価する必要だってないじゃないか」
そう、わざわざ評価を求める必要すらない。
聞いた話だと、進級試験はボウライを一柱呼び出すだけでも合格できるのだ。
「良いのよ。他人が聞いてわかる事だってあるんだから」
そう言って手を振りながら笑うその姿は、演奏を始める前とは打って変わって親しげな物であった。
使用していた単身楽団を仕舞い終えた彼女は、僕が本当は何でこの学校の授業を見学したりする事を許されているのか等と聞きながら実習室の扉を開けた。
「ん？なにアレ」
実習室の側にある窓から見える位置に置いてあったのは大きめの箱だった。
普通に見ただけでは何もおかしな所がないただの箱である。
いや、人が一人入れそうな箱が置いてある時点でおかしな事ではあるのだが。
それ故に、ツゲさんは窓際に寄ろうと歩き出していた。
だが――
「待ってください！」

僕がそれを止めた。
いや、止めざるを得なかったのだ。
見鬼の力で見た僕の目には、あの箱の周囲だけに精霊素が存在していないのが見えたからだ。
精霊素が存在していないという事は霊気のバランスが偏っているという事で、アレは霊災に変わる可能性があるという事だ。
にも関わらず、アレは瘴気に転ずる気配もなくそこにある。
不気味なものにしか思えない。
「なに、アレが――」
――ドゴォオオオオオオオオン
『ガァアアアアアアアアアア!』
ツゲさんが僕に何かを聞こうとしたその瞬間、箱が爆発し中から瘴気を身に纏った精霊が咆哮を上げた。
「なっ……暴走精霊?!」
そうして、話は冒頭へと戻る。

第四楽章

暴走精霊とは、飢餓状態にある精霊の事だ。
飢餓状態といっても空腹であるというわけではない。
そも、彼等精霊は精霊素と霊気を用いて作った仮初めの肉体で生活している。
肉体の元となった生物の真似事をしなければ体調を崩す事はあるが、食事をしなければ生きていけないという訳ではない。
食事をしなければ体調を崩すといっても、物質化を解いてしまえば問題がないし。
なにより、仮初めの肉体は本来のソレを真似ただけであり、実際に稼働をしている訳ではないのだから。
心臓があったとしても血を送り出しているわけではない、肺があっても酸素を取り込んで二酸化炭素を排出しているわけでもない。
彼等はその肉体を何度でも作り直す事が可能であるし――最も人格の変化などが起きる可能性がある為、する者は少ないが――、最初に肉体を作るにあたってモデルにした存在がしなければ生きていけない行動を最低限模しているだけなのだ。
故に、彼等は肉体的に飢餓状態に陥る事はない。

ならば、何によって飢餓状態となっているのか。
先程言ったように、彼等精霊は肉体を何度でも作り直す事が可能であるが故に、本質は精神、或いは魂と呼ばれる存在にある。
勿論、物質化をしている際に傷つけられれば精霊であっても死んでしまう可能性が高いが、それは物質化をしているが故に肉体に縛られているからでもある。
彼等が死ぬ前に物質化を解いてしまえば、最低限の窮地は凌げるし、死ぬ事もない。
彼等が死ぬという事は精神的に死ぬという事である。
ならばそれと同じように飢餓状態となるのも精神的に飢餓状態となっているという事である。
さて、彼等精霊が精神的に飢餓状態となりうるものとは何か？
答えは『神曲』である。
精霊が糧としている神曲、それは彼等にとって麻薬にも等しい物である。
『其は盟約』
『其は悦楽』
『其は威力』
コレは精霊が神曲楽士と契約を結ぶ際の文句の一部分である。
トルバス神曲学院でも掲げられているこの言葉は、精霊にとって神曲を奏でる事こそ

が盟約であることを表している。
そして、神曲は彼等に悦楽と力を与える。
彼等は気に入った神曲を奏でる神曲楽士を見つけ、契約を結ぶ際に肉体を調律する。
そうする事でその神曲を深く感じる事が出来るようになるからである。
だが、コレこそが飢餓状態を引き起こす原因ともなる。
調律した彼等は他者の奏でる神曲を殆ど感じ取れなくなってしまっている。
此処で人間の場合として考えてみよう。
麻薬を使用している人間が、麻薬が切れた際、どうなるか？
新たな麻薬を手にするために行動を起こすだろう。
だが、手に入る全ての麻薬に効果がないとわかれば、自暴自棄になるだけである。
肉体こそが主体の人間ですらそうなのだ。
精神が主体である精霊がどうなるかなど、明らかである。
精神が弱り、思考能力が皆無となり、下級精霊ですら人間には太刀打ちする事のできない力の塊が情け容赦なく振り翳される。
そして、その後彼等を待っているのは『死』のみである。
勿論、ソレを回避する方法が存在しないわけではない。
一番簡単な方法は精霊の強い意思によって、神曲を聞く中で肉体の調律を徐々にずら

していく事で契約を解除する方法である。
だが、契約者の突然の死や、契約者が神曲を与えないような状況になってしまえば、それも変わってくる。
暴走してしまう前に、契約者に似た神曲を奏でる人物に協力を依頼して肉体の再調律を行う方法。
暴走してしまった後に以前の契約者よりもレベルが高い神曲によって意識を取り戻させ、急いで再調律を行う方法。
このどちらの方法もリスクが高い。前者はいつ爆発するか知れない時限爆弾のようなものである上に似た神曲を奏でる人物が見つからなければ暴走してしまうし、後者になれば神曲を受け付けない可能性が高いのだからと殺されるか放置することによる衰弱死という結果になる可能性が高い。
神曲楽士とはいっても人間である。
無理に命を懸けて精霊を助ける者は少ない。
故に、暴走してしまった精霊を助けるのは難しく、一般人が遭遇したのならば逃げ、神曲楽士が遭遇したのならば殺すか逃げるかという事が常識となっている。
だが、常識というものは往々にして覆されるものである。
「直ぐに単身楽団の準備をするから、時間を稼いで！」

「えっ、暴走精霊ですよ!?」
「そこら辺にあるもの何でもいいからぶつけなさい！相手は意識なんかないんだから反射で迎撃するでしょ!?」
無茶苦茶である。
勿論、神曲を奏でれば学院の警備員たるウォルフィスが駆けつけるだろうし、助かるかもしれない。
だが、暴走精霊はまっすぐこっちに向かっており、ウォルフィスが駆けつける迄の時間を稼ぐことも難しいだろう。
常識的に考えるのであれば、神曲楽士にすらなっていない自分達は逃げて、助けが来るのを待っていた方がいいのだ。
だが、どうにか出来る可能性がある。
そう思ってしまったが故に、彼女は単身楽団を取りに行ったのだろう。
さて、まずは近くにあった消火器から投げるべきだろうか……投げれるか？

◇◆◇

投げる物がなくなった。

文房具であれ、椅子であれ、消火器であったとしても投げつけた訳だが……それももうできなくなった。
いや、最後の一個に関しては煙幕になった為、かなりの時間が稼げたのだが。
ツゲさんは慌てているらしく、先に演奏した時に単身楽団を展開した時よりも遥かに遅い速度で展開をしていた。
「よっし、出来た！さぁ、行くわよ！」
だが、僕には不安があった。
落ち着いて単身楽団の展開をできないような精神状態でマトモな神曲が奏でられるのか？
もし、マトモな神曲が奏でられたとして、ウォルフィスがあの精霊を倒す事が出来るのか？
ちらりと見ただけでも暴走精霊の羽の数は六枚、上級精霊である事がわかる。
調べた内容によれば、中級精霊と上級精霊の力の壁は厚い。
優秀な神曲楽士の補助があれば倒す事が出来るそうだが、現実は非常である。
彼女、ツゲ・ユフィンリーは神曲楽士の資格すら取っていない学生である。
……なんとかなるのだろうか？

第五楽章

（どうして……?!）

ユフィンリーは予想外の状況に焦りを感じていた。

とにかく単身楽団を展開して、神曲を奏でる事ができればなんとかなると思っていた。

幸運にも神曲を奏でる事ができた。

だが、集まった精霊は数柱のボウライのみ。

飢餓状態の上級精霊相手では時間稼ぎにしかなりはしない。

（早く、早く警備員の精霊を呼び出さないと……）

頼みの綱である学院常駐の精霊も現れず、刻一刻とユフィンリーの精神は削られていく。

焦りは思考の低下を生み、思考の低下は神曲を奏でる能力にも影響を及ぼしていた。

そもそもの問題として、暴走精霊を倒したいのか助けたいのかもはっきりと考えていない状態で奏でられた神曲では、雑食と言えるボウライといえども時間稼ぎ程度にしか行動する事はできない。

ボンッ
また一柱のボウライが傷付き、慌てて物質化を解除させる。
もはやボウライ達は好き勝手に攻撃するだけとなっていた。
「ツゲさん、落ち着いて下さい！」
「煩い！なら、あんたがやりなさいよ！」
学院長が見いだし、連れてきたという少年。
本当にそうだというのならば、神曲を奏でる事くらい出来るだろう。
そうして、普段の彼女なら絶対にしないであろう考えを口にする。

◇◆◇

「煩い！なら、あんたがやりなさいよ！」
その神曲に、先程のような意思（ココロ）は込められていない。
あるのは焦りと苛立ち。
とてもじゃないが、神曲を奏でられる状態ではない。
それでも彼女が奏でる旋律が神曲として成り立っているのは、単に彼女の才能のお陰だろう。

だが、それでは足りない。
目の前の暴走精霊を押さえるにしても、倒すにしても。
力が。
心が。
神曲が。
何もかもが足りない。
足りないのなら、新しく足せばいい。
今、それが出来るのは僕だけだ。
だけど、つい先程まで神曲のなんたるかを理解していなかったような僕が、神曲を奏でる事が出来るのか？
旋律に霊気を乗せて奏でれば、確かに似たような物にはなるだろう。
だが、想いを込める。
僕は精霊が答えてくれるような想いを込めた事がない。
それに加えて、補助としての機能を持つ筈の単身楽団の展開方法もわからない。
演奏をするのなら式紙として持っている楽器を使う事になる。
……出来るのだろうか、僕に。
『家の事なんて知らない。僕は僕のやりたい事をする』

式符を見て、僕が父さんと母さんに言った言葉を思い出した。
それを認めてくれたからこそ今の僕があり、この式符が此処にある。
『故に奏でよ。汝が魂の形を』
そして、トルバス神曲学院が掲げている言葉の一節を、精霊達の契約の文句の一部分を思い出した。
ただ、自由に。
自分を表し、やりたい事を曲に込めればいい。
気がつけば、自然と持っていた式符に手を伸ばしている自分がいた。
その手にトランペットを呼び起こし、自分のやりたい事を思い浮かべる。
その意思（ココロ）は――

◇◆◇

ユフィンリーは信じられない気持ちでいた。
咄嗟に口をついて出てしまった言葉だった。
確かに学院長に才能を見いだされたのかもしれないが、学院に入学もしていないような少年が――それも自身よりも四つも年下の少年が――神曲を奏でる事が出来るとは

思っていなかったのだ。
だが、目の前にある光景はどうだ？
天から響くような金管楽器特有の音が、軽快な、テンポの早い旋律を奏でているではないか。
単身楽団も展開していない、そんな楽器など何処に持っていたと思う余裕すら今の彼女には無い。
その旋律に思わず手を止めてしまったが、それに気がついた彼女は再び神曲を奏で始める。
今度は意思を込めて、少年の奏でる旋律に合わせるように。
その効果は劇的であったと言える。
あれほど待ち望んでも来る事のなかった警備員の精霊が、近くにいたであろう下級精霊が現れては暴走精霊に立ち向かっていく。
そうして、暫くたった頃。
暴走精霊が身に纏っていた精霊雷（スピリチュアルライトニング）――精霊がその力を行使する際に用いるエネルギー体であり、その見た目は雷の様である――が薄れ、その姿を明確にさせた。
銀色の毛並みが美しい、獣形態の精霊、ベルスト。

その形状は猫だろうか。
精霊は暴れる事をやめ、ゆっくりとその姿を薄れさせる。
それは、死んだのではなく物質化を解除したのだろう。
それを理解した瞬間、ユフィンリーは大きく息を吐き出しながら床に座り込んだ。
「終わった……みたいね」
「……はい」
横を見れば、少年――奏希といったか――は精も根も使い果たしたというかの様に床に倒れ込んでいた。
その姿を見て、終わったのだとユフィンリーは実感した。

第六楽章

暴走精霊の事件から少し経ち、入学式のシーズンとなった。
この季節になると縁側でグデンと横になっていそうな兄の事を思い出す。
今頃、彼は何をしているだろうか？
時期としては既に中学生になっている筈だ。
恐らく本家の女の子と楽しく過ごしているのだろう。
あの二人はいつも一緒だった。
……僕なんかが入り込む余地すらないほどに。
「……はぁ」
こんな事を考えてしまうのも、現在の状況のせいだろう。
『――は我々の善き隣人であり、そうあろうとしています。ですが、彼等は一個人である事を忘れてはいけません――』
遠くから聞こえる声を聞き流しながら、ため息をつく。
それもこれも、今自分が着ている服にある。
赤いチェックのネクタイ。

黒いズボン。
肩の部分だけが黒に染められた白のブレザー。
……トルバス神曲学院の制服である。
学院長さんとの約束の期限まではあと二年程あった。
だが、そうも言っていられない状況になってしまった。
それもこれも――
「ちょっと、話を聞かなくていいの？」
美しい銀色の毛並みに銀灰色の縞模様を持った猫が訝しげに話しかけてくる。
――コイツのせいだ……。
セヴニエーラ・バス・ヘリオラル、暴走精霊の事件の時に暴走していた精霊で、事件が終わってからは毎日のように精霊契約を求めてきた。
そもそも、暴走精霊になったのだって人間に騙され、精霊文字――人間が精霊の行動に強制することが出来る文字で、コレで書かれた内容に意思ある精霊は逆らうことが出来ない。文の意味よりも文字の形の方が重要で、少しでも文字が欠ければ効力を失ってしまう――……それも接触禁止、行動禁止といった文字で固められた箱に閉じ込められ、神曲も得られずに文字との矛盾によって力を削り続けられていたからだというのだ。

契約を結んでいなかったからこそ神曲への依存性が低く、解決をする事ができたわけだ。

普通なら人間不振に陥っていてもおかしくないというのに、再び人間に関わろうという気になるのは凄い話である。

そんな話を小耳に挟んだ学院長さんにこう言われてしまったのだ。

『精霊、それも上級精霊に精霊契約を求められているのならば、もはや誤魔化す事はできません』

学院内を自由に歩き回り、授業を見学していた僕は教職員や学生の間から学院長がスカウトしてきた人材のように見られていたそうだ。

……まぁ、完全に間違いではないのだが。

それ故に、上級精霊に精霊契約を求められてしまえばその話をデマだと言うこともできず、来学期で１３歳……トルバス神曲学院の入学の最低年齢になる。

入学しなければ確実に問題になる。

要するに、面倒だから入学しろという話だった。

「いいんだよ……セヴニエーラと契約した時に言われたことと同じなんだから」

ゆっくりと学ぶ事ができなくなった元凶に敬語なんか使う気はない……。

上級精霊だろうがなんだろうが一つの生命体であるのは変わらない、特別な存在とし

て考えすぎるなと学院長さんも言っていたし。
というか、今言っている事がそれだ。
「そう……まぁ、あの腹黒の話なんて聞く価値もないわね」
そう言うとセヴニエーラは左の列をチラリと見てから物質化を解いた。
……そっちの方が失礼だと思う。
「なぁ、今のってお前の契約精霊なのか？」
「はへ？」
「「ぷっ」」
急に声を掛けられ、変な返事を返してしまった……。
それを聞いた両脇にたっていた青年達が軽く笑う。
自分が悪かったと言っても、笑われるのは流石に良い気分ではない。
「あー……すまんな」
「あぁっ……ゴメン！」
「……はぁ、いいですよ」
彼等が悪かったというわけではないし、謝ってもらえただけ十分というものだろう。
そう考えたのがわかったのか、先程声をかけてきた茶髪の青年がニヤリと笑う。
悪戯好きそうな笑みを浮かべているが、かなり整った容姿をしているために悪い印象

は感じなかった。
「サイキ・レンバルトだ。同期なんだから敬語はいらないぜ？」
その言葉に続いたのか、もう一人の黒髪の青年も口を開く。
「あ、タタラ・フォロンです。僕も敬語はいらない、かな？」
そう言って苦笑するその姿は、カッコいいプレイボーイといった印象のサイキさんに比べて、苦労人の優男といった印象を受ける。
「ツチミカド・ソウキです。サイキさん、タタラさん、よろしくお願いします」
「いや、固いって。名前で良いぜ？」
「うん、僕も名前で良いよ？」
「……はぁ。よろしく、レンバルト、フォロン」
……予想以上に強引な同期生だったようだ。
まぁ、対等に話せる同期がいるのは気楽でいい。
この出会いに感謝しよう。
……ところで、この世界では何に感謝をすれば良いんだろうか？

◇◆◇

入学式から暫くたったが、フォロンとレンバルトは見ていて飽きない。
特にフォロンは予想の斜め上を行っていると言って良かった。
この学校に入る前提として楽器の練習は皆していたらしく、初回の授業では楽器の演奏に蹴躓く人間は居なかった。
楽器の演奏には。
ピアノを演奏しようと歩けば、楽譜を落とす。
慌てて楽譜を取ろうとしゃがめば、他の人間が持っていた楽器ケースに頭をぶつける……等。
とにかく、演奏を始める前段階でのトラブルが起きる。
また、フォロンは孤児院の出身らしく、学院で唯一認められている食堂のアルバイトをして学費と生活費の一部を稼いでいるが、皿を落とすのは序の口。
料理を客にぶつけそうになるわ、聞き間違えて注文した物とは違う商品を大量に持ってきたり。
一時間の間に何も起こらない事などあまりない。
そんな状態が続いたために、タタラ・フォロンはかなりのどじっ子であると同学年の人間に認識されている。
だが、僕の中でのその認識は単身楽団を使用した初回の実技授業で覆された。

それは、実技を担当しているミカザキ講師が見本として一度演奏した後に起こった。
それぞれが一人づつ演奏していき、フォロンの番になる。
何時ものように展開でもたついて時間を掛けてしまっていたが、その演奏は想像の埒外であった。
彼は見本として演奏したミカザキ講師の演奏を殆ど再現していた。
発せられる霊力も、曲に込められた想い、演奏に関しては拙い部分もあったが。
だが、それは神曲足りえない。
当たり前だ。
自分の意思（ココロ）を込めているわけではなく、ただただ感じた感覚のみで再現していただけなのだから。
彼がその事に気付けば、どんな神曲であっても奏でる事が出来るのではないだろうか？
その事に気がついたのは、演奏をしていたミカザキ講師と聞いた直後から何かを考え込んでいるレンバルトだけだろう。
その後に演奏をしたレンバルトは感覚的に神曲を理解しているのか、ボウライを一柱だが呼び出す事に成功していた。
だが、一番最後に演奏した僕は散々とも言える内容だった。

まず、単身楽団を使用した演奏は初めてだったが、展開をした瞬間に異変は起きた。
単身楽団は霊力の拡散を誘発する効果があるのか、霊力を認識している僕には効果が高すぎたのである。
簡単に言ってしまえば、音を一つ鳴らしただけで精霊素が集まり、一節を演奏した直後には実習室が精霊で埋まってしまったのである。
当然、それだけの精霊が一つの場所に集まれば、人間の体にも影響を与えてしまう。
僕を除いた全ての人間が意識を失い、僕も三十秒にも満たない間に拡散した霊力だけで限界に達してしまい、気を失った。
その後、異変に気がついた学院長さんが全員を保健室に運び、事実を隠蔽した。
曰く、ガス漏れが原因で全員が気を失った。
もちろん僕はそれが間違っている事を理解しているが、あまりにも多くの精霊を見てしまった他の人間は脳がオーバーヒートを起こしたようで、僕が演奏する少し前からの記憶を失っていたらしい。
それを聞いた学院長さんはこれ幸いと気を失った原因をガス漏れにしてしまい、実習室の一つを一時的に閉鎖する事で解決した。
その後に単身楽団を使用しないで演奏する事を義務付けられてしまったが。
……正直、あれをもう一度使いたいと僕は思えない。

第七楽章

「……はぁ」

早春、木に花の蕾が付き始めた頃。

僕はため息をつきながら学院の校門へと向かっていた。

「鬱陶しいわね。そんなに嫌なら断りなさいよ」

「生活費と学費を出して貰ってる身だからね。雑用くらいはしないといけないんだよ……それに」

「それに？」

「頼まれた学院内の案内が嫌な訳じゃないんだ。……学院長さんの雰囲気が、ね？」

「あぁ……腹黒の方ね」

僕に学院の案内を頼んだ際の学院長さんは何かを企んでいる時のような胡散臭い雰囲気を纏っていた。

彼がそのような雰囲気を纏っていた時、総じて良い事があったようには思えない。

二年前の暴走精霊の時、校内の見学を許可すると言われた時も同じ雰囲気を纏っていた。

全てが学院長さんの掌の上な気がして、気が滅入ってしまうのだ。

「――――曲学院前っ！」

気がつけば、既に校門まで来ていたらしい。

落ち着きをなくした小動物ように銀髪の少女に話しかけている金髪の少女が見える。

髪の色は違うものの、二人の顔立ちは似通っており、姉妹――それも恐らくは双子であると見当がつく。

「来たよ来たよ遂に来たよっ！ねぇねぇプリネ、遂に本物のトルバス神曲学院まで来ちゃったよ?!うわぁ、綺麗、大きい、すっごい！」

……というよりも、テンションが上がりすぎではないだろうか。

紫のリボンで二つに結んだ長い髪がピョコピョコと跳ねて、尻尾のようにも感じてしまう。

「嬉しそうだね……ペルセ」

自分と同じ顔の少女がはしゃいでいる様を見て、何処か困ったかのように声を掛ける少女。

こちらの少女は金髪の少女と同じ色のリボンで髪を飾っているが、金髪の少女と比べると地味な印象を受ける。

その光景を見るだけでも、二人の少女は双子であっても性格がまるで違う事がわか

る。

……ん、双子？

そこで、学院長さんの言葉を思い出す。

『案内するのは双子の姉妹らしいので、直ぐにわかるでしょう』

そう言って、顔写真を見る事もなく追い出されたのだが……なるほど、確かに双子のようだし、直ぐにわかる。

「えっと……ユギリさんでいいのかな？」

ビクンッ！

と音が立ったかのように金髪の少女は固まり、錆びた機械のようにゆっくりと此方に振り向いた。

「は、ははは い！ユ、ユユギリ・ペルセルテです！」

「はい、ユギリ・プリネシカです」

流石に、自分がはしゃいでいたのを第三者に見られるのは恥ずかしかったのか、真っ赤になって慌てながらペルセルテさんは自己紹介をした。

それを見て、プリネシカさんも苦笑をしながら自己紹介をする。

「僕はツチミカド・ソウキです。今日は二人の案内を任されています」

「「よろしくお願いします！」」

「あ、同い年だそうですから、固くならなくても良いですよ?」
再び固まるペルセルテさんと目を見開いて驚くプリネシカさんを見て、僕は思わず笑ってしまった。
……人を驚かせるのって、意外と楽しいかもしれない。

◇◆◇

「ほえ～、これが神曲学院の中かぁ」
トルバス神曲学院は外見こそ昔の王宮をそのまま利用したために豪華であるが、校内の様子は通常の学校と大差がない。
廊下も教室もありきたりといえる内装だが、それでも通常の学校とは一線を斯くす物がある。
例えば、複数存在する実習室であったり、多くの教室が防音仕様になっていたりと様々であるが、その際たる物は――
「くぴ!」
――学校の見学に対してルート案内を下級精霊（ボウライ）が行っている事だろう。
本来ならば、下級精霊だけに任せて僕のように説明する人間が同行するといった事は

ない筈だが……。

「……それだけ、この子達が重要って事なんだろうな」

「それか、貴方をこの子達に会わせておきたかったんでしょうね。あの腹黒は」

セヴニエーラの言葉を聞いて、ニコニコと笑っている学院長さんの顔を思い出してしまい、再び溜め息が漏れる。

あの人は何を考えているかわからない……。

「流石、神曲学院！案内まで精霊がやってくれるなんて、こんな間近で顕在化した精霊を見たのなんて初めてだよ～。これだけでも下見に来た甲斐があったね！」

案内をしていたボウライを捕まえたペルセルテさんはくるくると回りながらプリネシカさんに同意を求める。

それに簡単な返事を返しながらも少しハラハラしているプリネシカさんの様子を見るに、何かと舞い上がるのはペルセルテさん。

それを見守りながら、暴走しそうなら引き留めるのがプリネシカさんの役割と二人の間では決まっているようだ。

そうして、暴走しかけながらも見学をしていくペルセルテさんを横目に、プリネシカさんは僕の肩に乗っているセヴニエーラをチラチラと見る。

「あの……もしかして、そちらの猫は――」

――ぐぅ。

セヴニエーラが精霊だと気がついたのか、質問を使用としたプリネシカさんの言葉に被せるように、音がなる。

どうやら、音源はペルセルテさんのようで、少々顔が赤くなりつつ笑っている。

「あ、あはははは」

「……えっと、丁度良い時間ですし、食堂で話しましょうか」

第八楽章

「ココ食堂、コダワリコック長ノオススメ日替ワリ定食、ニンキ……ニンキ？」
いや、そこで訪ねられても本当かなんて僕は知らないんだけど……。
食堂に着くと説明を始めるボウライ……いや、ギガちゃん。
このギガちゃんというのは、ペルセルテさんが食堂に着くまでの間に――
『ボウライは名前じゃないんだから名前を付けてあげなきゃ！』
といって、名付けたものだ。
由来はなんか強そうだから。
……確かに人間を人間って呼ばないようにボウライにも名前があっても良いかもしれないけれど、その名付け方は如何なものか……。
「学校の食堂にコック長がいるの?!さすが神曲学院……」
「……呼び方の問題で、どこの職場でも一番偉い人はいると思うけど」
ペルセルテさんの驚きの声に対して、プリネシカさんの呟きが聞こえる。
プリネシカさんの言葉は通常であるのならば間違ってはいないが、此処神曲学院においては間違いだ。

トルバス神曲学院は古くにあった王宮を改装して作られた学院で、それに合わせてレストランを開く事ができるレベルのコックを雇っている。

……まぁ、学院長の趣味らしいが。

「ね、ね、神曲学院の制服着た人達がたくさんいるよ」

……神曲学院だし、制服を着ていないのは精霊だけじゃなかろうか。

「神曲学院の中だし、当たり前だと思う。それよりも余所見してると……あっ」

先行しながら右へ左へ視線を動かすペルセルテさんを落ち着かせようとしたプリネシカさんは何かに気がついたかのように声をあげる。

「きゃっ?!」

「うわっ！」

次の瞬間、見覚えのある青年がペルセルテさんとぶつかった。

当たり前のようにペルセルテさんと青年は体制を崩し、尻餅をつく。

普通ならこの後はお互いに謝って終わりになった筈だ。

……青年が大量の料理を抱えていなければ、という前提が付くが。

青年が持っていたトレイの上に乗っていたジュースやドレッシングがかかったサラダは重力に従い、ペルセルテさんの上に降り注ぐ——

「ペルセ！」

プリネシカさんの言葉も虚しく、ペルセルテさんはそれらを頭の上から被ってしまう。
「ひゃぁあっ！」
どうやら、襟元からジュースに浮いていた氷が背中に入ったらしく、悲鳴をあげて床を転がるペルセルテさん。
少しして落ち着いたのか、ゆっくり顔をあげ、自身の惨状を確認して声をあげる。
「うぇ……ベタベタするぅ。最悪だぁ……」
これを聞いて漸く我に帰ったのか、青年は慌てたようにハンカチを取りだし、ペルセルテさんに近づける。
「すすす、すいません！直ぐに拭きま――」
『拭くな！』
それと同時に青年の頭にスプーンがぶつかり、一人の女生徒がゆっくりと前に出てくる。
「……フォロン、あんたは何をしようとしてたのかなぁ？」
「いっ……え……ハンカチで汚れを拭こうと……」
「ええ、それは分かるわよ……で？ど、こ、を拭こうとしてたか言ってごらんなさい」
そこで、青年――タタラ・フォロン――は自分がハンカチをペルセルテさんの胸に伸

ばそうとしていた事に気がつく。
「わっ！す、すすすみません！」
「はぁ……で、見学者なのよね？」
その様子を見て、女生徒――ツゲ・ユフィンリー――は溜め息をついて、こちらを見る。
「……はい。彼女の着替えを貸して貰えませんか？ユフィンリー先輩」
「はいはい、フォロンはコレを片付けときなさい。その後はソウキと一緒に此処で待機」
そう言って、ツゲ先輩はプリネシカさんとペルセルテさんを連れて、食堂から出ていった。
「……はぁ、またやっちゃった」
「まぁ、ペルセルテさんには改めて謝りなよ。それよりも……」
「え……？」
自身の起こした惨状を確認して溜め息をつくフォロンに、食堂の厨房を指し示す。
そもそも彼が何故多くの料理を抱えていたのかといえば、学院で唯一認められている食堂のアルバイトをしていたからだ。
アルバイトということは上司がいるということである。
僕が指し示した方向にはかなり苛立った顔をしたコック長が立っている。

「……行ってくるね」
ソレを確認したフォロンは肩を落としながら厨房へと向かう。
コック長のあの顔から、暫くは説教から帰ってくることはないだろう。
「さて……」
僕はチラリと床に散らばった料理の山を確認する。
……まずはコレをどうしたものか。
◆◇◆
ペルセルテとプリネシカの二人に学院の制服を貸し出し、食堂に戻ってきたが、料理は未だに片付いていない。
どうやらフォロンはコック長に叱られているらしく、そのまま放置されている状態のようだ。
「あら、まだ片付けてなかったの？」
「えぇ、フォロンは説教されてますので、自分が片付けようかとも考えたんですが……」
「……あぁ、調度良いから待ってたってこと？」
それを苦笑いで見つつ、二年前からの付き合いである後輩は片手にギターを用意していた。
せっかくトルバス神曲学院に着たというのに、神曲の演奏を見ることができないとい

うのも可哀想だ……とでも考えているのだろう。
　既に今日の実習の授業は終わってしまっているし、学院内では指定の場所以外で単身楽団を用いて神曲を奏でる事が禁じられている。
　このままでは今回、彼女達がそれを見ることは難しい。
「あの……なんの話ですか？」
「まぁ、見てれば分かるわよ」
　私達の会話を聞いて、よく理解ができなかったのだろう。
　ペルセルテとプリネシカは戸惑いながらも楽器の調整を行っている後輩――ツチミカド・ソウキ――の後ろ姿を眺めている。
　さて先程、トルバス神曲学院では神曲の演奏が禁じられていると言ったが、正確には実習室から単身楽団を持ち出し、演奏する事を禁じている。
　これは、現在の神曲楽士のほぼ全てが単身楽団を用いなければ神曲を演奏する事ができないからである。
　故に、単身楽団を持ち出して演奏する事を禁じれば基本的に問題はない。
　だが、何事にも例外という物が存在する。
　トルバス神曲学院は神曲を演奏する事ができる許可をもって運営しており、学院内では基本的に講師の立ち会いの下であれば神曲を奏でる事は違法ではない。

これは、言ってしまえば神曲楽士の資格を持っている学院関係者であれば、学院内では何時如何なる時でも神曲の演奏を行うことが可能である。
そして、ツチミカド・ソウキは『神曲楽士の資格を取得している学生』だ。
しかも、単身楽団を用いずに神曲を演奏する事のできる天才である。
だが、基礎課程と専門課程を合わせた四年間の内二年目で神曲楽士の資格を取得しているというのは、学院に通っている意味はあるのだろうか……昨年、学生の身でありながら資格を取得した私に言う資格はないのかもしれないが。
「まさか……ううん、でも」
「え……冗談、だよね？」
そうこう考えていた内に、ソウキの準備が整ったらしい。
それを見ていたペルセルテとプリネシカは何をするか分かったようだが、手にしているのが単身楽団でないために信じられないでいるのだろう。
そして、ソウキの腕が振りかぶられる。

第九楽章

それは、特別上手いと言える演奏ではなかった。
技巧に任せた早弾きの曲でも、最近の流行に合わせた曲でもない。
有象無象の音楽家などより上手いだろう。
だが、人気のある音楽家のには及ばない。
奏でられるその曲はいくつものコードとスタッカート気味に跳ねた音で小気味良いリズムを刻む。
それに合わせて、一つ二つと光が現れ始める。
それ等は彼が弾く曲の名前のように彼の回りを舞い、周囲の人間を楽しませる。
「……うそ」
正直に言って予想外だった。
ペルセルテはそう考えながら呟いた。
通常、現代の神曲楽士は単身楽団を用いなければ神曲を奏でる事ができない。
何故なら、昔の神曲楽士と違い、現在の神曲楽士は神曲を自力で奏でる力がないからである。

それでも単身楽団を利用すれば神曲を奏でる事ができるのは、単身楽団の核でもある集積回路として使用している賢者の石が神曲の力を強めているからだ。

だが、目の前で演奏している少年は単身楽団ではなく、ただのギターで神曲を演奏している。

その光景はペルセルテにとって目指すべき場所であると同時に、決して辿り着けないと考えてしまうほどの高みにあるものだった。

現代の神曲楽士が単身楽団を用いなければ神曲を奏でられないのは、文明が発達によって、精霊に対する感謝や魂の表しかたを忘れてしまったからであると専門家の間では囁かれている。

だが、そもそも神曲において大きな割合を占めるという魂の形とはなんなのだろうか。

それが分からないからこそ、現代の神曲楽士は単身楽団が必要なのだろう。

では少年、ツチミカド・ソウキはそれがわかっているのだろうか？

答えはきっと否定だろう。

ペルセルテは神曲楽士になるために多くの事を調べていたが、知っている事は多くはない。

世に存在する『天才』、それも単身楽団を用いないで演奏している人間は皆、特筆して

神曲という謎に対する答えを持たなかったそうだ。
それを糧にしている精霊に質問しても、彼らにとって神曲とはそういう物であり、言葉に表すならば契約時の言葉こそが最も近いと答えている。
「これが……神、曲」
心の底から掻き乱されるような、それでいて暖かく包み込むような感覚。
初めての感覚に戸惑いながらもペルセルテは彼の一挙一動を見逃さないように見続けていた。
後にユギリ・ペルセルテは言う、『この神曲を聞いたからこそ今の私達がいる』のだと。

◇◆◇

「これが……神、曲」
ユフィンリーは溜め息をつきたかった。
隣でペルセルテが感動したかのように呟いているが、問題はそこではない。
音を鳴らした瞬間に周囲の空気が変化した事を。
回っている精霊達に合わせてゆっくりと床を汚している料理が宙に浮き始めている事を。

精密な作業を精霊に行って貰うには神曲楽士の腕も相応でなければいけないにも関わらず、精霊雷で汚れを落としつつ持ち上げさせているという事を。

彼女は気がついているだろうか。

世にいる神曲楽士にそれが出来るかと聞けば首を横に振る者が大半を占めるだろう。

にも関わらず、ソウキは鼻歌混じりにコレを実行する。

才能があるないという話ではないのだ。

もはや次元が違う。

そんな物を入学前の神曲楽士の卵にすらなっていない彼女達に聞かせるのは悪影響になるのではないだろうか。

ソウキの演奏を聞いて、多くの生徒が自信を失ったのを知っているが故に、ユフィンリーはペルセルテとプリネシカを心配していた。

ソウキにとって曲の通りに娯楽を提供しているつもりなのだろう。

下級精霊が舞い踊り、中級精霊が曲のリズムに合わせて地面に落ちた料理を片付けていく。

今も尚、生徒の中には目を輝かせている者もいるが、絶望したかのように落ち込んでいる者もいる。

楽しい筈のメロディが絶望への行進曲に思えてならない。

……本当に退学者が出てしまわないかが心配だ。
そう考えながらユフィンリーは溜め息をついた。

第十楽章

あちらの世界では星詠みと呼ばれる予知に近い占いが存在するが、それとは別に占星術と呼ばれる占いも存在している。

これは、陰陽術や密教、神道等の術が土御門夜光と呼ばれる人物によって纏められる遥か昔に陰陽師が使用していた物だ。

術と言ってはいるが、占星術は見る事のできる星から未来を読み解く技術であり、霊力やソレを練り上げた呪力といった物は必要としない。

それ故に術の実力に関わらず、星を読み解く事に長けている者こそが陰陽師として優れていた者であったそうだ。

何故そのような話をしているのかと言えば、術を使うことができなかった僕は占星術にも触れる機会があったというだけの話である。

結果として、星を読み解く事はできなかったが、空を見ればどの星が何処にあるかが分かるようになった。

そんな事ができるようになったところで、旅人にでもならない限り役に立たないのだが。

それでもオリオン座の位置が徐々に地面に近づいているのを見ると、冬が終わると感じる事ができる。
それだけでも趣があるというものだろう。
思えば、この世界に来てから僕は星空を見る余裕すらなかった。
この世界の常識やこの世界の文明がどの程度発達しているか等、知らなければいけない事が山ほどあったのだから。
例えば、この世界は四面八臂の唯一神によって創造された物であるらしい。
四つの楽器を用いて曲を奏で、世界を創造したのだとか。
あちらの世界の人間からしてみれば眉唾も良い所だ。
そして精霊の影響によってか、おかしな発展を遂げている文明。
発電は全てが精霊と神曲楽士頼み。
宇宙という言葉が存在せず、大航海時代に当たるものがないにも関わらず、ポリフォニカ大陸内を運行する飛行機が存在していたり。
自分達が立っている世界が星かどうかすら分かっていない。
空を見上げればあちらと変わらない星空が見えるというのに、この世界はどういった発展を遂げてきたのだろうか。
ん……!?

「貴方ねぇ……現実逃避してないで、さっさと歩きなさい！」
「……え？」
どうやら、思考に没頭してしまっていたらしい。
現在は夜中。場所は校舎前である。
本来なら学生は自宅に帰っていなければならない時間なのだが、今回ばかりはその校則は適用されない。
何故なら、昼間にはっちゃけ過ぎた罰で学院内の見回りをしろと言われてしまっているからだ。
「わかってるよ、神曲楽士の資格持ってるんだし、多目に見てもらえると思ってたんだけどな」
「多目に見たからこの程度なのでしょう？」
……まぁ、適当な罰を与えておかなければ他の生徒に示しがつかないとかいう理由なんだろう。
「何か考えていたような気がするんだけど……思い出せないなら大した事じゃないかな」
「重要ならすぐに思い出すでしょうしね」
「じゃあ、ちゃっちゃと見回りをして帰ろう……か？」

校舎の扉に鍵を差し込み、回す。
だが、鍵を開けた際の手応えが感じられない。
「どうしたの？」
「……鍵が空いてたんだけど、不味いかな」
セヴニエーラは何も答えずに頷き、回りを警戒し始める。
その姿を見た僕は、片手にハーモニカを喚び出して、扉を開ける。
可能性として、ありうるのは希少な鉱石でもあり単身楽団の心臓部でもある賢者の石を狙った泥棒、学内に生徒が忍び込む或いはこの時間まで残っているの何れかだろう。
「……あれ？」
そこまで考えたところで、覚えのある霊力を感じた。
「……セヴニエーラ、もしかして」
「ええ、フォロンの神曲みたいね。……もっとも、今度のは生きた死体みたいな神曲じゃないようだけど」
聞きたい。
普段、マトモに神曲を演奏できない彼が奏でる音を、セヴニエーラが神曲だと認めるソレを。
今いる場所では霊力しか感じられない。

神曲を聞く事が、できない。
気がつけば、僕の足は動き出していた。
演奏が終わる前に、その想いを耳にするために。
走る。
一歩踏み出す毎に、感じられる霊力が強くなっていく。
跳ねる。
階段をかけ上がる毎に微かに音が聞こえるようになる。
そこで、僕は一つの事に気がついた。
聞こえる音が鍵盤特有の澄んだ音でなく、人の声であるという事に。
「歌……?!」
神曲を歌う、多くの人間が挑み、失敗してきていた物。
ソレを、神曲すらもマトモに演奏できなかった彼が実現させている。
今まで実力を隠していたのか?
否。恐らく彼は、神曲のなんたるかを理解していないのだろう。
だからこそ、聞いたままを演奏する。
それしかする事ができなかった。
ならば何故、彼が今神曲を奏でることができているのか。

単身楽団を使っていないから神曲を奏でられないと考えているからであり、彼としては何かを思いつつ、気晴らしに歌っているつもりだからであろう。
『何処にいるのか』
『また、会いたい』
そんな思いが見え隠れするような神曲だった。
きっと彼自身の思いが込められているからこそ、神曲になったのだろう。
そんな事を考えながら、僕がフォロンの下に辿り着いた頃。
神曲の演奏は終わっており、聞き覚えのある歓声が上がっていた。
「フォロン、最終下校時刻は過ぎてるよ……プリネシカさんとペルセルテさん？」
とりあえず声を掛けるべきだと思い、僕は教室へと足を踏み入れる。
そこに居たのは、窓際で固まっているフォロンと興奮したように話しかけているペルセルテさん、その姿を穏やかに見つめているプリネシカさんだった。
……とりあえず、何が起きているのか教えてほしい。

第十一楽章

（あれだ……あの、歌だ）

常人でさえ三日どころか数時間でも居れば発狂してしまうような闇の中、ワタシは目を覚ました。

あれから幾らの時が経ったかなど、この場所では無意味。

その闇は断絶の証であり、封印の証でもあったからだ。

だが必然か、偶然か、そんなモノはどちらでも良い。

今重要なのは、その闇の封印に亀裂が生じているという事だ。

存在の再構築。

朧気な意識の浮上。

身体を構成するものがゆっくりと互いに結合し、意味を持つ。

時間と共にそれ等は複雑化していき、その身に掛かる呪縛を押し退ける。

何故、自身が今も存在しているか。

そんな事はどうでも良い。

今はただ――

（ワタシは……私はあの歌だけをずっと待っていた……）

——今はただ、あの歌の下に向かうだけ。

◇◆◇

どうやら、プリネシカさんとペルセルテさんは制服を借りた後に返し忘れてホテルに帰ってしまったらしい。

それだけなら明日にでも学院に来ればよかったのだが、預けていた荷物の中に財布もあったらしく、急いで取りに来たらしい。

その後、更衣室を探して学校の中で迷子になった末に、どこからか歌が聞こえたのでそこまで来たんだとか。

三人が夜の学院に居た理由を聴きながら、ペルセルテさん達の目的地であった更衣室に案内する。

「……それなら仕方ないですね。フォロンは掃除とかで遅くなったんでしょ？」

「あははは……」

大体の見当がついていたフォロンの理由を聞いてみれば、返ってきたのは乾いた笑い。どうやら図星だったらしい。

「あの後、コック長に食堂の掃除をしろって言われてね」
「ごめんなさい……私がよそ見をしてたから」
「いや、お互いさまだから気にしなくても良いよ。何かにつけて僕は不器用だから……神曲も基礎課程の二年目の最後だっていうのに、まだできないしね」
「……え？」
　フォロンが掃除をする事になった理由が昼間の件にあると分かり、ペルセルテさんは謝るが、フォロンは気にしなくて良いという。
　その際に言った神曲が奏でられないという言葉にプリネシカさんは疑問の声をあげた。
「大丈夫です！あんなに綺麗な歌を歌えるんですから、神曲だってできるようになります！」
「ありがとう。うん、元気が出てきたよ」
「歌と言えば、僕は最後の方しか聞けなかったんだよね」
「そうだ。また、フォロンさんの曲を聞かせてください。ソウキさんの演奏も聞きたいです」
　だが二人はプリネシカさんの声に気づかなかったのか、そのまま会話を続けている。
　無視する形で話を続けるのはプリネシカさんには悪いが、フォロンにはこのままもう

一度歌を歌ってもらって、自信をつけて貰いたい。
「いや……そ、そうだ。ソウキが先に……」
「悪いんだけど、昼に無許可で神曲弾いた罰として夜の見回りしてるから無理かな」
「……残念です。でも、プリネもフォロンさんの歌を聞きたいよね？」
どうにも自信が持てないのか、フォロンは後に伸ばそうとするが、そうはいかない。
そもそも、今僕が学校にいるのは勝手に神曲を演奏した罰であり、罰を受けている最中、緊急時でもないのに演奏するのは問題がある……という事にしておく。
実際のところは、神曲ではない普通の演奏なら問題はない。
「……是非」
「そ、それじゃあ……」
あまり強い意思表示を見せることがなさそうなプリネシカさんもペルセルテさんに賛同し、フォロンは観念したのかゆっくりと深呼吸をする。
そして、意を決して歌おうとした時――
『ＫＫＫＫＩＩＩＩＹＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡａａａａ!!』
――耳をつんざく奇声が校舎に響き渡った。
「なに、これ?!」
「これって……」

いきなりの事態に、ペルセルテさんとプリネシカさんは耳を塞ぎ、フォロンは何かを感じたのか、辺りを見回した。
それと同時に覚えのある感覚が僕の身を包む。
「セヴニエーラ！」
「あの腹黒に関わると碌な事がないわね……暴走精霊よ」
学院内で二度も暴走精霊との遭遇する。
暴走精霊に遭遇すること自体が珍しいというのにも関わらず、僕はセヴニエーラの時と今回で二度も遭遇している。
……偶然というには難しく、何らかの形で学院長さんが関わっているというセヴニエーラの考えも可笑しくはない。
「やっぱりか……でも」
何かが違う。
聞こえた声には力が込められており、その力は瘴気に紅い精霊素が混じっていた。
そこから感じられた意思は『独占』。
セヴニエーラのように我を忘れて暴走しているようには感じない。
「とにかく、三人は実習室まで走って！」
「え、ええ?!」

「暴走精霊を止めるには神曲しかない。少しでも可能性を高めるためにも、フォロンは実習室で神曲を弾く準備を！」

恐らく、暴走精霊が求めているのはフォロンの神曲だろう。

フォロンが歌を歌おうとするのを妨害するようにあげられた奇声。

しかも、そこから感じられた意思は『独占』。

セヴニエーラの時は契約していた相手がいなかったからこそ、僕の演奏でもなんとかなった。

だが、今回のように何かを求めている精霊相手では意味がないだろう。

「ソウキさんはどうするんですか!?」

「なんとかならないか試しつつ、足止めする！」

それを聞いた三人は走るのを躊躇っていたが、そんな余裕はない。

暴走精霊がいると思われる方向――瘴気が感じられる方向――へと僕は走り出した。

第十二楽章

精霊は極めて不安定な存在である。
改めて、暴走精霊を見て思った事だった。
彼等の肉体は一種の精霊素と霊気で構成されている。
しかし、霊気は八種の精霊素が内に存在しなければ瘴気へと転じてしまう物である。
ならば、一種の精霊素に霊気を混ぜた状態である精霊は即座に瘴気へと転じなければならない。
にも関わらず、彼等がその存在を保っていられるのは何故か。
それは、彼等という精神、あるいは魂が少なからず関係しているのだろう。
精霊素に宿るそれらが霊気を操るが故に、瘴気へと転ずる事なく肉体が構成される。
だが、霊気を操る事が出来るだけの自我がなければどうだろうか？
霊気は瘴気に転じ、その存在は霊災に近い物へと変化するだろう。
その自我が存在しない状態こそが暴走精霊なのではないか。
そう考えた時、目の前の精霊に可笑しな点が存在している事に気がついた。
人の輪郭を保っている。

肉体を構成する事が難しくなっているからこそ、セヴニエーラは不安定な輪郭で暴走していた筈だ。
身に纏う瘴気の濃度が薄い。
セヴニエーラの時は霊災であると感じてしまう程に濃い瘴気を身に纏っていた筈だ。
「……まさか、自我があるっていうのか？」
「暴走直後なら、可能性はあるかもしれないわね……」
残念だが、僕もセヴニエーラもこの精霊がどのような経緯を辿って暴走したのかを知らない。ならば、これ以上の考察は無駄というものだろう。
暴走精霊はゆっくりとだが確実に、フォロン達が居るであろう方向に向かって飛行している。
その背には紅い六枚の羽が鈍く輝いていた。
「セヴニエーラ……」
上級精霊同士、力の差は戦ってみなければわからないと言われている。
僕はセヴニエーラに問題がないかを確認し、セヴニエーラはそれに無言で頷いた。
今、行動する事が出来るのは僕達だけだ。
前回のユフィンリー先輩がやってくれたように、僕に出来る事は全て行わなければならない。

意を決し、僕は片手に持っていたハーモニカに息を送り込む。
昼間に奏でたような物ではセヴニエーラの行動を阻害してしまう。
精霊というのは良くも悪くも神曲に影響をされてしまうからだ。
そうして、戦闘をイメージさせるような速いテンポの神曲が奏でられた。
セヴニエーラは音の移り変わりに合わせるかのように走る速度を増していき、暴走精霊の周りを回り始める。
暴走精霊がセヴニエーラを無視して進もうとすれば、セヴニエーラは精霊雷をもってそれを妨害する。
精霊雷が霊力から成るのか、精霊素から成るのかはわからないが、その地面に穿たれる様は雷を思わせる。
精霊は精霊雷を様々な形に変化させて扱う事が出来るが、セヴニエーラは細々とした事はしない。出来ないのではなく、しない。
彼女はその力をもって単身楽団を作り上げることが出来る程に熟練した技を持っているが、限界まで俊敏に行動できるように凝縮した身体に精霊雷を纏って特攻した方が効率が良いと考えているからだ。
多くの精霊は彼女の速度に追い付く事はできないし、そのような相手に神経を使う事こそ無駄である。

故に彼女の力は物を作る時にこそ発揮される事が多い……らしい。
らしいというのも、セヴニエーラが戦う姿を見るのは今回が初めてだからだ。
基礎課程の授業というのは、ひたすら神曲を奏でる事が出来るようにする為の段階で、実戦を目的とした授業は存在しない。
故に、戦うような機会がある筈もなく、今回が初めての実戦というわけだ。
移動しながら攻撃を仕掛けているセヴニエーラだが、暴走精霊は気にしないとでもいうかの様に歩を進める。
攻撃が当たっても、移動し続けるその姿はハッキリいって不気味だ。
このままでは足止めにならないと、僕は神曲に意識を向けた。
とたんにセヴニエーラは精霊雷の放出を止め、その性質を変化させる。
ただのエネルギーから物質のような性質へと変わったソレはロープのように巻き付き、暴走精霊を縛り上げる。
（よし、これで暫く足止めできる！）
そう考えた瞬間だった。
『――ＡＡＡＡａａａａａａａ!!』
「あっ……」
暴走精霊は縛り上げていた精霊雷を引き千切り、その勢いに任せて飛び出した。

速度に特化したセヴニエーラからしてみれば直ぐに追い付ける速度だった。
だが、僕の神曲がそれを邪魔していた。
『目の前の暴走精霊を縛り付けろ』
ただそれだけの意思だった。
だが、その意思を込めて演奏し続けてしまったが故に、セヴニエーラは束縛を引き千切られた際に再び縛り上げようと神曲に合わせて動いてしまったのだ。
「……クソッ！」
『神曲は精霊の助けにもなるが束縛にもなる』
そんな風に言っていた講師の台詞が頭に過る。
……失敗だ。
大事な所でやってはならないミスをしてしまった。
……だが、まだ終わってはいない。
神曲は演奏できる。
セヴニエーラも消耗していない。
フォロン達の下に暴走精霊は辿り着いていない。
「セヴニエーラ……まだ、行けるよね？」
僕はセヴニエーラと共に実習室に向かって走り出した。

◇◆◇

「ソウキさん……大丈夫でしょうか」
実習室に辿り着き、単身楽団の展開を始めた所でペルセルテは呟いた。
彼女が心配するのも無理はない。
暴走精霊というのは、基本的に会うことがない上に破壊しか齎さないといった認識が一般的だ。
しかも、数年前の『嘆きの異邦人』と呼ばれる神曲楽士と精霊のグループによるテロ活動の影響で、精霊自体が危険な存在であると認識している人間も少なくない。
「大丈夫だよ」
そんな存在を友人が相手にしていると言うのに、フォロンが全く不安に感じていないのは彼の非常識さを何度も目にしてきたからだろう。
入学時には普通の楽器でも神曲を奏でる事ができた。
初めて単身楽団を使った時は数秒と掛からず、実習室を精霊で埋めた。
一つの楽器を使い続ける人が殆どの中、コロコロと使用する楽器を変え、演奏は一定のレベルを維持し続けていた。

楽器ケースを持っていないのに、気がつけば彼の手には楽器が握られていた等、自分が見聞きした内容をフォロンが話していくとペルセルテの表情は次第に和らいでいく。
「……本当にそんな事が出来るんですか？」
「流石に、実習室を精霊で埋めたっていうのは噂だけどね」
だが、フォロンには彼がそれをできないとは思えない。
そんな彼だからこそ、暴走精霊と対峙しても怪我をするような事はないだろうと思う。
そう話したところで単身楽団の展開が終わった。
だが、ソウキに指示されたのは此処までだ。
これからどうすればいいのか、フォロンにはそれがわからない。
単身楽団を展開したという事は、神曲を奏でるという事なのだろう。
だが、フォロンは今までに一度として神曲を奏でられた事がない。
そもそも、奏でる事ができていたのならば基礎課程から専門課程への進級試験に不安等感じてはいないだろう。
ガンッ
「……え？」
何かが叩きつけられるような音が実習室に響く。

トルバス神曲学院の実習室は神曲を扱うという関係上、音が外に漏れないように防音処理がされている。
それは当然、外からの音も通さないという事だ。
ガガンッ
「……まさか」
にも関わらず、音が実習室の中に響いている。
勿論、室内に音源となる物などない。
それが何を示しているか等、考える必要はない。
ズゴンッ
ソウキ達が敗北、あるいは精霊の足止め失敗したという事に他ならない。
「……ケタ……ミツケタ!」

◇◆◇

実習室の壁を破り精霊が突入してきた時、ユギリ・プリネシカは焦っていた。
実際に暴走精霊を見ているわけではない。
だからこそフォロンもペルセルテも暴走精霊が近くにいる事を実感していない。

だが、彼女はソウキ達と同じタイミングで暴走精霊の存在を認識してしまった。
同じように育ってきた筈のペルセルテよりも、彼女は暴走精霊の危険さを理解していた。
理解していたからこそ、いざという時は自分が何とかしなくてはいけない。
それは全てが終わってしまうという事を意味している。
それでも、目の前に迫った危険から目を反らすことはできないと覚悟を決めて前を見る。
「……女の子？」
「ペルセ、問題はそこじゃないよ……」
だが、彼女の覚悟は双子の姉の言葉によって粉砕された。
確かに、紅い精霊雷で覆われていても、シルエットから少女の形態を取っている精霊である事は分かる。
しかし、目の前にいるのは暴走精霊である。
消滅するまで放置するか、戦って消滅させるか、神曲によって暴走状態から解放するかの三つに一つの方法でしか対処をする事ができない暴走精霊。
そのような言葉を発する余裕などない。ない、筈だ。
だが、ペルセルテとフォロンは先程まで自分が焦っていたのが馬鹿らしく思える程に

落ち着いている。
危険さを理解していないのか、なんとか出来ると考えているのか、状況を理解すらしていないのか、ソレすらもわからない。
それでも――
ポロン……
――フォロンは既に神曲を奏で始めている。
奏でているのは先程と同じ、旅人が長い放浪の果てで昔の日々を懐かしむような歌だった。
置き去りにした何かを悲しんでいるように聞こえていた筈のそれは、再会を喜んでいるかのように明るい物に感じる。
それこそがプリネシカには意外だった。
先程まで、神曲を奏でた事がない等と直前の歌すらも否定していた。
だからこそ、単身楽団の設定は問題ないか、自分に精霊を鎮める事が出来るのかと不安に思い、硬直するのではないかと考えていた。
だが、結果は真逆。
力強く、自信を持って演奏するその姿は、一端の神曲楽士と変わらない。
暴走していた筈の精霊は精霊雷の放出を弱め、徐々に身体の緊張を解き、その神曲に

身を委ね始める。
『君はどんな曲が好き？』
『君を癒したい』
『今は君だけの為に』
そんな思いが透けて見えるような神曲はプリネシカにとっても心地良い。
佇む精霊の姿に自然な柔らかさが漂い、紅い髪がゆっくりと靡き、神曲が流れていく。
そして。
「……」
プリネシカが、ペルセルテが、少女の姿をした精霊が、後から追い付いたソウキ達が、皆が無言で立ち尽くす中、最後の一音を弾いてフォロンはゆっくりと息を吐く。
やりとげた達成感を感じたのだろう、フォロンの頬が緩む。
それを見て、プリネシカは全てが終わった事を実感した。
舞うような軽やかさで、精霊はフォロンの下へと歩き始める。
恋の熱が冷めぬ乙女のように徐々に速度を早め、フォロンの目の前で立ち止まる。
そして――
ごんっ
『……え？』

――いきなり拳を固めて彼の頭を殴り付けた。
微笑ましい光景を見るかのように目を細めていたソウキとセヴニエーラ。
事態がなんとかなったと思って安心していたペルセルテとプリネシカ。
そのどちらもが目の前の光景に思考を止めた。
「何年待たせたと思っている?!」
「……え?」
そう怒鳴った少女からは先程までの危険な雰囲気は感じない。
だが、少女の顔からは怒りと嬉しさがごちゃ混ぜになったような感情が感じられた。
「え……えぇ?」
いきなり殴られて罵倒されたフォロンは困惑して、状況が理解できておらず、曖昧な声を漏らすだけとなっている。
それを見た少女はもう一度フォロンを殴り、ため息をつく。
「おい、私だ。コーティカルテだ。まさか忘れた訳ではないだろうな!?」
「えっと……ごめん」
「お前は!自分が契約した精霊の事も覚えてないというつもりか?!」
そういって更にフォロンの頭を殴る少女は、既に泣き出しそうになっている。
「え、えぇぇぇぇぇぇ!?」

事情はわからない。
だが、フォロンが悪いという事だけはわかった。

第十三楽章

「侵入者？」

「というよりも泥棒ね」

そう言って、ユフィンリー先輩はお茶を一口飲んでからため息をついた。

ユフィンリー先輩は僕達が専門過程に進級すると同時に卒業し、ツゲ神曲楽師派遣事務所という事務所を設立した。

初めのうちは学生時に資格を取った天才という事で注目をされていたが、若さという点で安心感に欠けており、全くと言っていい程仕事の依頼がない状態であったらしい。

そこで、ユフィンリー先輩は安心して依頼ができるだけの力量を持ったメンバーを集めてしまえばいいと考えたらしい。

そんなメンバーを集めるにはどうすればいいかを考えた際、母校であるトルバス神曲学院において優秀な成績を修めている生徒を勧誘すればいいと考え、学院長に勧誘の許可を申請。

結果、勧誘の許可と今期の成績優秀者のデータを報酬とした一定期間の夜間の警備を依頼されたそうだ。

「確かに、暴走精霊が絡んだ事件が在学中二回もあった訳だし、警備の強化も念頭に置いてるんじゃないかとは思ってたけどね？」

あ、これはやばい。

そう感じた僕とセヴニエーラは耳を塞ぐ。

「なんで初日から、そんなもん（侵入者）が出るのよ!?」

ダンッ

拳を叩きつけられた衝撃によって、机に乗っていた料理の皿が大きく音を立てる。

それを見たセヴニエーラは呆れたようにため息をついた。

「あの腹黒がそんなマトモな仕事を依頼するわけないでしょう？」

学院長が関わると大抵トラブルに巻き込まれる。

それが僕がこの世界に来てから学んだことだ。

故に、学院長直々の依頼というあからさまな地雷源に踏み込んだユフィンリー先輩が迂闊だったということである。

「……まぁ、初日からってところが予想外だったってだけよ。『相手も馬鹿ではありませんし、三日たって現れなければ別の方法に切り替えているでしょう』なんて学院長は言ってたけど……一週間も音沙汰がないのよねぇ」

相手も馬鹿ではないって……、あからさまに犯人分かってるじゃないか。

……何を考えているんだろう、あの人は。
「と、いうわけで……最近変わった事はないかしら？」
「変わった事……」
「……ねぇ」
無い訳ではない。むしろ、ある。
というよりも、視界の端で奇妙な宣伝を行っている存在がそれだ。
『このシダラ・レイトスを超える天才であるコマロ・ダングイスになんっでも、聴きたまえ！あぁ、そこの君にはまだ名刺を渡してなかったね』
コマロ・ダングイス、四楽聖と呼ばれる、ある意味で神曲楽師の頂点とも言える存在の一人であるシダラ・レイトスを上回る天才だと考えている存在だ。
その実力は基礎課程から進級する事が二回も出来ず、今年も再入学をしている時点で御察しと言える。
まぁ、演奏だけならプロの音楽家として食っていけるだろう。
コマロ・ダングイスとは、そういう存在である。
再入学当初は落ちこぼれと言われていたフォロンが契約精霊を手に入れて進級していた事にやっかみ、ちょっかいを出していたようだが、一月程前に起きた進級試験の再試験において膨大な数の精霊を呼び出したという噂（実際に呼び出したのだが、僕の時

のように殆どの生徒が覚えていなかった）を聞いた為か、それも鳴りを潜めていた。
だが、ここ二、三日の間で契約精霊が出来たらしく、以前の調子を……いや、以前よりも酷い調子で自身の契約精霊を自慢している。
「もしかして……あれ？」
「真偽はともかくとして、契約精霊ができたそうです」
「あれを神曲だと考える精霊がいるなんて、未だに信じられないけどね」
賢者の石によって拡散される霊力は他の人間と大差がない。
だが、込められている意志が問題だ。
自己陶酔、自己満足、そういった自己愛にまみれた意思を込めた演奏しかダングイスは行わない。
誰かがそれを指摘したとしても変わらず、ダングイスの演奏に込められた意思は『僕の神曲を聴け』『僕の神曲を聞けることに感謝しろ』『さぁ、僕の前にひれ伏すがいい』とでもいうような傲慢な物ばかり。
それでいて、技巧ばかりに意識を傾けているために精霊に対して意識を向けていない。
そんな演奏は雑食として有名なボウライにすら神曲として認識されていない。
それ故に、セヴニエーラが毒づくのも解ってしまう。

むしろ、そんな演奏を続けているにも関わらず、その辺を浮遊している精霊に攻撃されないのが不思議なくらいでもあるのだが……。

「今年も入学したってのが私には驚きよ」

かつて同級生でもあったユフィンリー先輩から見れば、神曲云々よりも三回目の基礎課程入学という事の方が驚きのようだ。

まぁ、根性がある人や神曲楽師に未練のある人でも二回目の入学で諦めるのが普通であろう。

だが、ダングイスにはそれが当て嵌まらない。

「ほら、先輩。ダングイスには特技がありますから」

「……あぁ」

「あれは精霊でも真似しできる者は少ないでしょうね」

コマロ・ダングイス、本人は気が付いていないが、特殊な特技を持っている。

『都合の悪い事は忘れる』という物である。聞いただけだと誰もがやっていそうな事であると思ってしまうが、彼の場合は本当の意味で忘れてしまい、自分にとって都合のいいように記憶を改竄してしまうのである。

今回の場合、自分の有り余る才能に嫉妬した職員の嫌がらせで進級できなかったが、寛大な心で許しやろう。という事らしい。

……正直、この特技だけでも芸人として食っていけそうなのは気にしてはいけない事である。

第十四楽章

「で、ダングイスに契約精霊ができたっていうのが変わった事って訳ね」
……実際のところは、他にも理由があったりするが、僕にしか見えない物は証拠にはならないだろう。
例えば、契約精霊と神曲楽師の間には僕の世界の式神と術者の間のように薄い霊力のラインが結ばれているが、彼らの間には結ばれてはいない……とか。
まぁ、そういった視点で見るのならば、他にも疑問に思う人物は何人かいるのだが。
学院長とか、学院長とか、学院長とか。
「まぁ、普通に考えれば本人の努力が実ったで済むんですが……」
「今回の場合は可笑しいってわけね」
「ええ、彼は精霊を神曲の奴隷に近い何かと勘違いしている節がありますから」
「……本当に、長期間学園に在籍していたのかしら?」
ユフィンリーは軽く溜息をついてから立ち上がり、ダングイスに何か変化があるようなら連絡をするようにと言って、去って行った。
そもそも、何も起きないという事自体があり得ない。

そんな事を思いながら、少し離れたところで騒いでいるダングイスとその契約精霊を見る。
僕の見た精霊の姿は額に二枚の羽を生やしたタヌキ。
本人はアライグマを主張しているが、あれはタヌキであった。
自身の精神の変化を恐れないのであれば、精霊は形どっている姿を変える事が出来る。
それ故に、自身の世界において人を化かすとされるタヌキの姿をしているのは何とも皮肉が効いている。
おそらくだが、今まさにダングイスはあの精霊に化かされているのだろう。
……さて、どうなることやら。

◆◇◆

あの後、学院長に侵入者について聞きに行った。
しかし、返ってきた言葉は――
『些事ですので貴方が気にする必要はありません』
――というものであった。

「あの言い方ってさ、もう犯人の目星はついてるって事だよね」
「ええ、しかも泳がせている最中でしょうね」
僕が元居た場所に帰る手がかりが見つかったなどという言葉で話を逸らそうとする程だ。
その手がかりも何時から見つけていたのか、怪しいものだろう。
「はぁ……ん？」
結局、手がかりについての話すらも授業時間が近づいているという理由の下、まともに話す事すら出来ず学院長室から追い出されてしまった。
まぁ、次の授業時間に関しては遅れる訳にはいかないので仕方がないのだが。
そんなことをセヴニエーラと話しながら、授業場所の教室へと向かっていると、見覚えのある後姿が目についた。
「おーい！」
「む……ソウキ、だったか？」
声を掛けないのも不自然だろうと、前を歩いていたフォロンとコーティカルテに声を掛けるが、どうやらタイミングが悪かったらしい。
あからさまに、不機嫌そうな顔で僕を一瞥し、また前を向いてしまった。
「あ……あはは、ソウキ達もこのまま教室に行くの？」

コーティカルテの態度に困った顔をしつつ、フォロンは僕らに問いかけてくる。
この後僕らが受講するのは、ただの授業という訳ではない。
去年まで学んできた事を後輩である基礎課程の生徒に教える事で自分達の復習と後輩の学習を助けると言った目的がある授業時間だ。
しっかりと去年までの授業内容が身に付いていなければ恥をかいてしまう上に、後輩の勉学の妨げにもなってしまう為、責任を持って行動する事が求められている。
「うん、そのつもり。……まぁ、単身楽団が上手く扱えない僕に教えられる事があるのかといえば、未だに疑問だけどね」
「フン……どこも似たような物に決まっている。授業ごっこには変わりないのだからな」
「まぁ、ソウキの場合は単身楽団が扱えないからという理由でフォロンと二人で授業ができる分、他よりも形にはなっているでしょうね」
まぁ、その代わりと言っていいのかはわからないが、僕等が教えるクラスの生徒は少々癖のある生徒が混じっている。
例えば――
「あっ、フォロン先輩とソウキ先輩！おはようございます！」
「おはようございます」

――ユギリ・ペルセルテにユギリ・プリネシカ。

年度末にあった騒動で一緒になった二人はトルバス神曲学院への入学を果たしていた。

そして、二人は僕等の担当だと言うかのように入学初日にして、このクラスへの配属が決定されていた。

そして、同い年だから敬語なんて使わずに対等な関係で話して欲しいと言っても聞いてくれないのが現在の悩みでもある……。

「うん、おはよう。なにか集まっていたみたいだけど、どうかしたの？」

教室に入ると、僕らが入ってきた事に気がついた二人が挨拶をしてくるが、他の生徒は僕らの姿に気付くことなく教室の中心に目を向けている。

一体何を見ているのか、予想がつかないわけではないが念の為ペルセルテに確認する。

「あぁ、それなんですけど――」

ペルセルテはすぐに僕の質問に答えようとしたが、幸せの絶頂とも言える声によって遮られる。

「――やぁ、フォロンくん、ソウキくん。調子はどうだい？」

僕らのクラスの問題児と言っても過言ではない男、コマロ・ダングイスが生徒達の中

心から出てきてそう言った。
その肩にはいやらしい笑みを浮かべたタヌキが乗っている。
それを見て、また面倒な事になりそうだと僕はひっそりとため息をついた。

第十五楽章

「お、おはようダングイス。調子はまぁまぁ……かな」
「まぁまぁ……ね。ま、フォロン君にはそれがピッタリかもしれないね！」
普段より、まともな挨拶をすることもなく自身の自慢話を繰り広げていたダングイスが挨拶をした。
その一点を見るだけでも何かがあったと思うだろう。
現に、普段は苦笑しながら話をしているはずフォロンが目を白黒させながらよくわからない感想に対して礼を言っている。
その様子を見ていたコーティカルテなど、小声でとうとう壊れたかと呟いてしまった程だ。
「ちなみに僕は絶好調さ！」
幸いな事に機嫌がかなり良いらしいダングイスにはその言葉が聞こえなかったらしく、その口が閉じられる事はなかった。
「ん？なんでそんなに絶好調かだって？聞きたいんだね、聞きたいんだろう？」
因みにではあるが。

彼が喋っている間、フォロンはおろか教室内にいる後輩ですら一言も喋ってはいない。

「それはだね、ようやく本当の神曲を理解してくれる存在が現れたからさ！」

「本当の神曲？」

止せば良い物を、フォロンは思わずと言ったようにダングイスに聞いてしまった。

彼の言う本当の神曲とは自身の神曲に他ならず、それを理解することのできない精霊は質が悪いという事なのだとか。

「そして、昨日ようやく出会ったのだよ！紹介しよう、バルゲス・ゴルト・グリディアムだ」

そういって彼は自身の肩に乗せていた精霊に目をやった。

その体毛は全体的に黒味を帯びた茶褐色。しかし、鼻の周りや腹の周りに掛けては黒みが薄れ、枯葉色に染まっている。

また、耳は側頭部ではなく頭頂部に一対丸いものが付いており、両手足は短く、胴体は丸みを帯びている。

その姿はまさに――

「……たぬき？」

「狸じゃねぇ!?」

まごう事なき狸であった（断言）。

「だから……狸じゃねぇ！」

◇◆◇

チッ……

挑発を繰り返しても乗ってくるのは俺たちが探していたと思われる精霊一柱のみ……。

標的のガキはどっちも反応すらしやがらねぇ。

片方は争い事にならないように気を使っている節があるが、もう一人のガキが厄介だ。

言葉の綾で出てきたコーティカルテ・アパ・ラグランジェスの本当に契約したのかという言葉に対して疑いの目で見てきやがった。

契約したかどうかなんて、普通の神曲楽師どころか精霊にすら見抜けねぇっていうのにだ。

紅の殲滅姫の選んだ契約者と奴の秘蔵っ子とやらを調査するだけの筈だったが……一筋縄じゃいかねぇな。

先程、奏希に狸と例えられた精霊――バルゲス・ゴルト・グリディアムは内心でそう毒づいた。
実習室で奏希達と会った彼は、偽りの契約者であるコマロ・ダングイスを嗾け、あわよくばその実力を見ようとした。
だが、神曲を奏でていると思わせたのにも関わらず、彼等は戦闘態勢に入ることはなく、講師による静止という形で幕を閉じた。
「さて、どうすっか……なぁ、どう思うよ?」
夕暮れ時の通学路を歩きながら、バルゲスはダングイスの少し後ろに向かって声をかける。
返事が返ってくる事はない。
そこは誰もいない空間なのだから。
にも関わらず、バルゲスは返事を得たかのようにニヤリと笑った。
「そうだな、お前にはもう一働きしてもらうか」
そう言って、バルゲスはダングイスを見る。
『さぁ、フォロン。どちらの方が優れているのか、雌雄を決しようじゃないか。ケッシヨウジャナイカ……じゃなイカ』
……おいおい、こんなんで大丈夫かよ。

虚ろな目で同じ事を繰り返し言い続けるダングイス。
それを冷や汗をかきながら見守るバルゲス。
彼等の先行きは非常に不安であった。

第十六楽章

「……っ」

上を見上げればネオンの海、下を見下ろせば星の海。

血の気が引いてしまうような浮遊感。

現在僕は絶賛落下中である。

それもまだ春が少し過ぎたはずの時期なのにも関わらず真夏としか思えない程の熱気をこの身に受けながら……である。

普段であれば慌ててしまうであろう状況ではある。

だが、それもすぐに終わる。

「――随分と、落ち着いているのね？」

静かな声とともに銀の紐状のものが僕を釣り上げる。

「自分が何もしなくても、助けてくれる相棒がいるからね」

改めて、周りの状況を確認する。

見覚えのある風景、明らかに春から外れた気温、……明らかに見覚えのない白い巨人。

「此処……何処？」
「……弾き出されたんだよ。多分……ね」
「……何処へ？」
——ポリフォニカ大陸から、僕の故郷へ……さ。

◇◆◇

時間はその日の夕方まで遡る。
「……ふぅ、これでだいたい終わりかな。思ったよりも時間がかかっちゃったね」
午後の授業で、神曲を演奏したダングイスとそれを止める事ができなかった僕とフォロンは罰として実習室の掃除をするように指示された。
まぁ、止めるどころかコーティカルテが応戦しようとしていたのを見逃してもらえたと考えれば安いものかも知れない。
「精霊の手を借りずに自分たちの手でって条件付けられちゃったからねぇ……」
「普通なら当然の事ですけど、ソウキ先輩がいますから……」
「それよりも、主犯がサボってるのが納得いきません！」
僕の呟きに言葉を返してくれたプリネシカとペルセルテは見ているだけで何もでき

なかったからといって掃除を手伝ってくれた。
……まぁ、以前に神曲を奏でて掃除を精霊にやってもらった僕がいるからこその条件だとはわかっているんだけど、２人には申し訳ないと思っている。
「あー……それね？ダングイスにはある意味すごい特技……というか才能があるから」
「才能……ですか？」
「そう、都合の悪い事は全部忘れる。もしくは都合のいいように記憶を改竄する。簡単に言ってしまえば現実逃避の才能があるって事なんだけどね」
「そ、ソウキ？それはさすがに言い過ぎじゃ……」
僕の発言に顔を引きつらせたフォロンが反応するが、隣でコーティカルテが頷いているのを見ると彼女も同意見のようだ。
「そいつの言うとおりだ。あの本当に契約したかどうかもわからんタヌキが突然消え去ったとしても、恐らく次の日には全てを忘れて今まで通りに行動するだろうな」
意見の方向性に関しては大きな差がないけど、言ってる事はさらに酷い。
普段からちんちくりんだの、本当に上級精霊なのか疑わしいだの、フォロンに精霊が喚べるわけがない等と主従揃って言いたい放題言われたからなぁ……さっきの騒ぎで憂さ晴らしができなかったのを根に持っているみたいだ。
そんな事を考えていた時、覚えのある感覚が近くで発せられた。

窓の外にはどこか歪な人影と蒼い輪郭の光。
「……これはっ」
僕が気がついたのに一拍遅れて何かに気が付いたコーティカルテが窓の外に視線を向けながら6枚の羽を展開する。
それと同時に人影とその周辺で霊力が拡散し、蒼い輪郭はその光を増す。
「ねぇ、セヴニエーラ。嫌な予感がするんだけど」
「あら、奇遇ね。私も嫌な予感しかしないわ」
……今回の罰掃除だが、最終的に学院長の温情でこの程度に済ませた云々と教師が言っていたような。
前回にしろ前々回にしろ、学園長が関わった事柄で学校に残った時は大抵事件に巻き込まれていたような……。
――ガシャン!
そんな事を考えている間に蒼い輪郭の光が窓を破りながら室内へと侵入。
その光は徐々に形を成していき、半人半獣の形態――リカントラへとその姿を変貌させる。
「――精霊?!」
「まさかこの前みたいに暴走してるんじゃ……」

先日のコーティカルテの一件を思い出したのか、顔を青ざめるペルセルテと近くに置いてあった単身楽団へと手を伸ばすフォロンの姿を見ながら僕は考える。

先程から外で拡散され続けている霊力、その一部がこの精霊に力を与えていることからこの精霊は契約精霊だということだ。

しかも、もしこれが何者かの思惑によって行われているのだとしたら、侵入直後に攻撃を仕掛けてこない理由は何か。

其処まで考えた時、考えたくもないことを考えてしまった。

霊的な繋がりが感じられないにも関わらず精霊契約を結んだという生徒の存在、先日学院に侵入したという泥棒、そのどちらもが今回の事と関係しているとしたら……。

先ほどから感じている拡散されている霊力の大部分がつい先程にも感じた覚えのあるもので間違い無いのだとすれば……。

今目の前にいるのはバルゲス・ゴルト・グリディアム。コマロ・ダングイスの契約精霊であると自称していた精霊という事になる。

ダングイスの霊力はバルゲスには一切供給されていないところを見るに、ダングイスの陰に隠れるように神曲を演奏して霊力を拡散している者こそが契約者なのだろう。

それが何者で、何の目的があるのかはわからない――

「……バルゲス・ゴルト・グリディアム、だっけ？正直に言って、そんな簡単に形状の変

化を行うなんて正気の沙汰じゃ無いと思うんだけど」
「なっ!?」
「えっ!?」
「ほう……?」
――が、それに付き合う理由が僕にはそもそも無い。
驚き方も人それぞれではあるが、バルゲス本人もフォロン達も皆、驚いたような声を上げる。
……まぁ、一柱だけ興味深い者を見るような目で声を上げた者もいたが。
「ダングイスはそこの所どう思う?」

◇◆◇

やばい!
俺がそう感じたのは俺の正体を見破ったあのガキの眼を見た瞬間だった。
理性や感情の前に感じたソレは俺の姿を参考にした獣特有の本能とでもいうべきものだ。
即座にガキども周辺の天井を精霊雷で吹き飛ばし、仮の契約者（ダングイス）を置き

去りに元々の契約者である女性の下へと走る。
想定外の行動に慌て、文句を言いはじめる彼女に計画の中止と本命の調査だけを行うように申告しながら、俺は本来の調査目標であった学校内では『開かずの扉』と呼ばれている地下階段を目指し、彼女を抱えて走り始めた。

走り始めた筈だった……。

突然体に力が入らなくなり膝をつく。
契約者であったライカは何が起こったのか察したのか、俺の腕から抜け出して振り返ることもせずに走り去っていった。
突然の事に思考が纏まらない。
何故俺が膝をついているのか。
何故俺の胸元から翠色の光を纏った腕が生えているのか。
何故、何故何故何故何故何故ナゼナゼナゼナゼナゼナゼ……。
「ダメじゃないですか、しっかり戦闘をしてくれないと……この調子なら戦力として手元に残しておくのは諦めたほうが良さそうですね」
身体の全てが粒子に変わる直前、そんな言葉を放つ翠色の人型を見た気がした。

◇◆◇

バルゲス・ゴルト・グリディアムの正体を言い放った直後。バルゲスは僕達の頭上を吹き飛ばし、消えていった。

頭上から落ちてくる瓦礫を思わず使ってしまったのであろう精霊雷でプリネシカが僕たちを護ったり、ソレを見て衝撃を受けてしまったペルセルテが周りの状態も確認する事なく走り去ってしまい、その後をプリネシカとフォロンが追いかけ、フォロンの後をコーティカルテが追いかけていくという事態があったが、僕としてはその直前に起こった現象に衝撃を受けてしまったので行動できず、その場に佇んでいた。

「ソウキ、もう動いて大丈夫よ?」

「あ、うん」

セヴニエーラの言葉にハッと気がついたものの、今も尚その場にある光景から目を離すことができない。

地下からせり出してくるかのように現れ、逃げるバルゲスの背中をその腕で貫いた学院長の姿が。

いつも通りに笑いながら此方に意識を向けつつ歩いてくるその姿が。

人でありつつも人でないことを表しているようでとても悲しく感じた。
その後の事はあまり覚えていない。
学院長に連れられて、巨大な鍵盤楽器のように見える何かの下に連れていかれ、鍵盤に触らされた。
そして生じた見覚えのある穴にセヴニエーラと共に落とされたというところだろう。
どうしてそうなったかなどはわからない。
だが、気がついた時には僕の身体はセヴニエーラと共に夜空に投げ出されていた。
そして全ては冒頭へ戻る。

ちなみに、ダングイスは瓦礫が降りしきる中、怪我をした様子もなくその場に立ち尽くしていた事だけは明言しよう。

東京レイヴンズ
第十七楽章

何故自分が故郷に戻ってきたのか。
かつて、エデンと呼ばれる場所から追放された者達の様に、僕は彼処で暮らす者達が知る必要のない知識を持っていた。
彼の楽園において、知恵という果実を人間は手にする必要がなかった。
そのようなものは生きていくために必要なかったからだ。
ならば、何故その果実は楽園にあったのか。
僕が思うに、果実そのものが人間の今後を決める試練だったのではないだろうか。
果実を食べなければ神が全てをお膳立てをし、果実を食べてしまったのであればその知恵を以って自立させる。
楽園から追放をしたといってもそれ以降、神が人間に関わることがなかったというわけではないのだからどちらにしても神としては構わなかったのではないだろうか。
そう考えた時、ポリフォニカ大陸のある世界を作った存在は知恵の実と言うべき物の存在を人間に与えなかった。

なにせ、この世界の創世神話は全てが精霊寄りの内容であったのだから。
それ故にあの世界に違和感を持ってしまった僕は防衛機構とでも呼ぶべき物によってポリフォニカ大陸から弾き出された。
あの鍵盤楽器……いや、あの世界を作ったと言われる四つの奏世楽器が一、『無限鍵盤（インフィニット・ピアノ）』に触れたその瞬間に。
「……まぁ、違和感を持ったというだけで、何に違和感を感じたのかさえ理解してはいないのだけれども」
「……ソウキ？」
直感的に理解した事に対して呟いた僕にセヴニエーラは訝しげな様子で尋ねてくる。
それに対して何でもないと返しつつ、僕は再び眼下の光景に意識を向けた。
何かの祭壇と思われる場所に在るナニカ。
一つはミイラのような見た目で背中に四つの白い羽根を生やしたナニカ。もう一度言うが翼ではなく羽根である。
そしてもう一つが背中に二つの白い羽根を生やした白い巨人。ただし、巨人といってもその形状はエネルギーで出来たシルエットのようにしか見えないナニカであった。
「……セヴニエーラ、僕の目がおかしくなったとかじゃないよね？」
どちらの存在も恐らく精霊、もしくはそれに類する存在だろう。

けれど、そのどちらもが自分の知っている常識ではあり得ない存在だった。
故郷において精霊などという存在は見たことがなかった。
……まぁ、それについては霊災すらまともに体験をしたことがないのだから知らなかったというだけで済ますことはできるだろう。
だが、あのような精霊はどちらも見た事がない！
片方は明らかに精霊が構築した肉体ではなく人そのものの肉体である上に、背中の羽根は徐々に端から崩れているのが見て取れる。
そして、もう片方はあれだけのエネルギーを持っているのにも関わらず二枚の羽根しか持っていない。基本的に精霊はその位階が上がる毎に振るう事の出来るエネルギー量が多くなる。逆に振るうエネルギー量が多いのならば位階も相応であるはずだし、後から精霊の位階が変化する程の何かが起きる事も余程の例外が無い限りありえない。
「あの巨人については、まだ自然に発生する事もあり得るけれど……」
セヴニエーラは酷く言い辛そうに口を開く。
どこか怒りを抑えるかのように、狼狽を隠すかのように……そして、憐れむかのようにその言葉を紡いだ。
「……もう片方は、ありえない。あれはーー」

――精霊奇兵、その出来損ないの成れの果てよ。

精霊奇兵。

かつてポリフォニカ大陸で猛威を振るったテロ集団、『嘆きの異邦人』が作り出した人と精霊を融合させて1つの存在にするという忌まわしい技術によって作り出された存在。

そうして生まれた存在は半人半精霊とも呼ばれ、肉体的損傷に弱いが精神的には安定している人間と、肉体的な損傷には強いが精神的な攻撃に弱い精霊。両者を融合することで、理論上は互いの弱点を打ち消すことができ強靭な存在となるという計画だったらしい。

だが、多くの場合融合に耐えられず、人格が破壊され唯の操り人形と化し、人格が破壊されなかった場合でも大抵は何かしら重大な問題点を抱えるとのことで、基本的には使い捨ての駒として運用されていたんだそうだ。

しかもセヴニエーラが言うには、本来と違ってアレは死体に精霊を押し込めているらしい。

恐らく、肉体の記憶によって精霊の人格が混乱しつつ崩壊しているのが今の状況で、このまま放置すれば精霊雷を維持することすらできず暴走し、いずれ肉体の耐久の限界が来たところで爆弾のように四散するとの事。

……反吐が出る。

セヴニエーラの説明を聞いて僕が初めに思った感想はそれだった。

そしてそれは意図的であれ、偶然であれ、あの存在を作り出した者が存在するという事だ。

「……セヴニエーラ、悪いけど手伝ってもらえる？」

「言われるまでもないわ。見てるだけで気分が悪くなるもの！」

このままにはしておけないし、作り出した者が同じ事を繰り返す前に止めなければならない。

そう考えながら僕達は再び夜空に身を投げ出した。